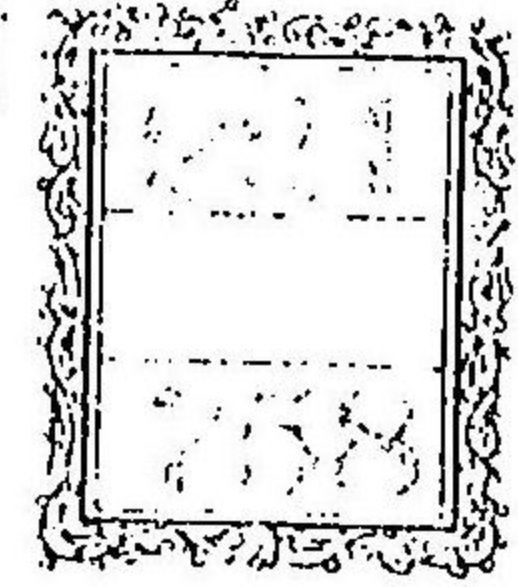


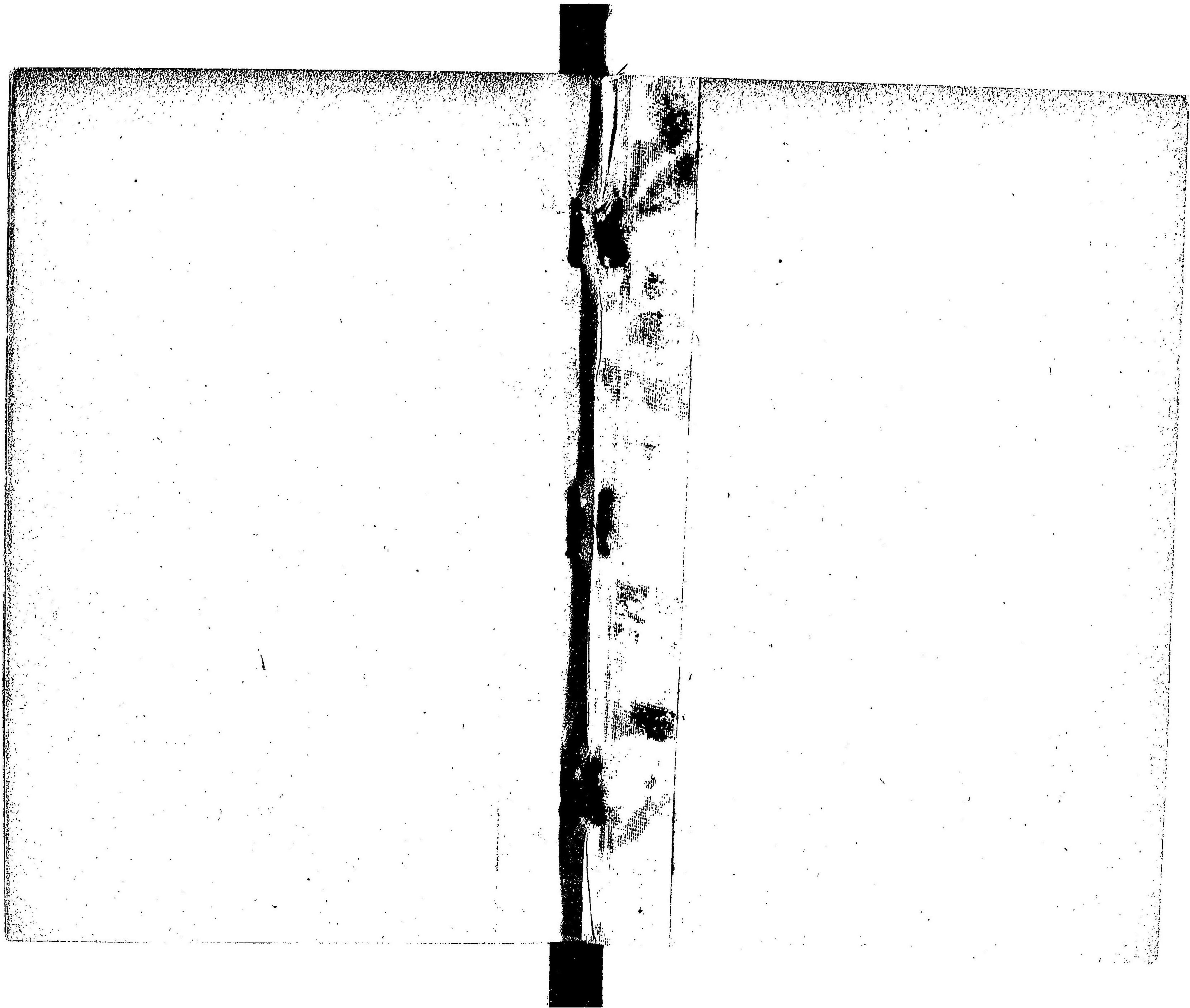
橋詰孝一郎著

訂正八

中學書翰文範

東京 明治書院





緒言

本書は、著者がこれ迄、生徒に教へ來りしものを、取捨し
 るに候ふ材料は、豊富といふにあらねど、おもに、學校
 活に關係せるものをあつめ、文例には、達意を主としたる
 ものと、やゝ粧飾したるものとを、ニツづつならべ、別に、類

明治 38 年 3 月 20 日
 内交

題、及び用語をかゝげしなど、學ぶ者のために、専ら應用の
 自由を得しめむと、つとめ申し候ふ。故に、やゝ、自費がまし
 き次第なれど、生徒の参考としては、世にありふれたるも
 のより、便利を興ふることも多からむと、信じをり候ふ。
 なほ、このたび訂正を加へたる結果として、作例、類題、用語

(三)
等も、まへよりはその數をまし、様式も、かねて、東京高等師範附屬中學にて定められしものと、やゝその趣をおなじうするにいたり候ふ。

明治三十八年二月八日

著者志るす

作法についての注意

一
手紙は、「口にて云ふ代りに、筆にてかくもの」に候へば、問題として課せられたる時も、かゝる場合にはかく云はざるべからずと、まづ、心に浮べることをば、前後せぬやう言語に連ね、その言語を文章に直すことを、つとめられたく候ふ。

二
學生の手になりし手紙を見るに、「貴君益御壯健の由」、「貴君おぼしめしはこれなく候ふや」、「貴君御賛成なし下されたく」、「貴君御都合如何に候ふか」などの如く、「貴君貴君」とかさたるもの、極めて多きやうに思はれ候ふ。まかし、手紙は、先方の人におくるものときまゝ居り候へば、かゝる場合にも、「益御壯健のよし」とか、「御賛成なし下されたく」とか認むれば、それにて、意味は明瞭なるべく、一々、「貴君」の二字を冠する必要はなき次第に候ふ。

三

時候の挨拶をかくにも、「時下春暖の節」とか、「寒さたへがたく」とか、おさまりの文字を連ねるは、あまりおもしろきこととは思はれず候ふ。それよりは、わが耳目にふる、四季をりく風の風物をとりにて、或は、わが現在のすまひなどをうつすに力を用ゐなば、その手紙に、一種の趣を添へて、頗るおもしろきことならむと存せられ候ふ。左に、その例をならへおき候ふ間、御一覽なし下されたく候ふ。

●桃の節句も、明日と云ふ今日は、ひなかさるとて、妹のさわぎも一方ならず候ふ。

●沙沼の舟遊と、大寶の散歩とをのぞくの外、若葉にこもれる下妻には、一も、吾人の耳目を樂ましむべきものこれなく候ふ。

●昨日より、學校の授業も半日となり候ふ。綠陰に「ハンモック」かけて、得意の「ハーモニカ」を吹奏するも、この時とよろこびをり候ふ。

●母は養蠶に忙しく、昨夕などは、生も、桑切りの助手を仰せつけられ候ふ。

●「新茶うり出し」の小旗、こゝかしこに見受けられ候ふ。

●昨日より夏服に着がへ候ふ處、去年は、すこし長かりし「メボン」の、今年は一寸ほど短うなりて、上着の前も、あはぬばかりに肉つき候ふ。

●昨夜より蚊帳をつりそめ候ふ。

●今年も、名物の蚊に苦しめらるゝならむと案ぜられ候ふ。

●今日は、弟とともに、涼み臺の新設に、一日を費し申し候ふ。

●月の色のみは、夏のものとも思はれず候ふ。

●都の君に誇るべきもの二つこれあり候ふ。一は、前の清泉にひやしたる西瓜の味ひ、一は、後の山にたえざる風のそよぎに候ふ。

●蟲の聲、風の響、秋の音づれば、都より、田舎がかへりて早かるべく候ふ。

●垣の朝顔やうやく小さく、百舌の聲、身にまむ秋となり候ふ。

●豊年の色は門田の稻にも見え、鎮守の祭も、例よりにぎやかなるべしとの噂に候ふ。

●背戸の柿もあからみ候ふ。御存知の栗もふみこぼれ候ふ。いかに樂しからむと待たるゝは、今年の見候ふ。

●冬とは云へど、いまだ波山の頂に積雪を見ず、埋火のもと戀しとも思はれぬ程のあたゝかさに候ふ。

●第二學期の試験も今日やうやく結了し、あすの今頃は、なつかしき父母とともに、夕飯の膳を圍みうることも存ぜられ候ふ。

●咲きそめし軒ばの梅も、夜の間の雪に埋れて、今朝の寒さの烈しさには、祝の水さへ氷り候ふ。

●朝毎にきこゆる鶯の音に、風は寒けれど、さすがに、春とはうなづかれ候ふ。

●糸たれし霧も、いつかかへりて、柳もゆる堤の彼方は、さながら墨絵の如き雨の景色とかはり候ふ。

四

今の世にては、巻紙と「はがき」とが、最も多く手紙に用ゐらるゝことに候へば、學校にても、巻紙、又は、作文「はがき」にて、書簡文は習はれたく候ふ。

五

巻紙に手紙をかく時は、書式にも示せる如く、紙の天(部上)をばあくるに及ばねど、地(部下)には五六分、左右には三寸内外の餘白をとり、行と行との間も、あまり狭からぬやうにするが、禮儀にて候ふ。

六

宛名の下に續くる敬語も、いろくあれど、他人には殿、親族及び婦人には様、團體には御中位に、ほととさだめたく、宛名のかたはらに添ふる語(脇付とも云ふ)も、めうへには、尊前、侍史、閣下、同等以下には、貴下、足下、御許位のものを用ゐられたく候ふ。

七

封筒書方も、別に示せる例につきて、御承知なし下されたく、かたはらなる細字の

注意は、見あつとさるやう願ひあげ候ふ。

八

封筒の表面にかく脇付の語は、六の處に云ひしものを、其ま、用ゐてもさしつかへなければ、平常の信書には、平信、無事、他見を憚るものには、親展、親披、至急を要するものには、至急、急用、返信には、奉復、貴酬などを用ゐるが普通にて候ふ。

書式につきての注意

- 用書の「國郡町村番地」は、明瞭にまた、められたく、府縣名はかくに及ばず候ふ。
- 市制施行の地は、國名をかくに及ばず、有名なる町には郡名を省くもよろしく候ふ。
- 先方の所轄郵便局の知れ居る時には、「何國何郵便局區何村」と用書すれば、早速の便にあり候ふ。
- 切手は、必ず、表面の左の上部にはりつけ、其下に、日附印を捺すだけの餘白を存しおか

《筒封の紙手きべす出差てに便郵》
て も お

○封じめには、みとめ印を捺すもよろしく候ふ。
れたく候ふ。

備中國上房郡松山村十八番地

松 下 虎 二 郎 殿

切手

親 展

ら う

明治三十八年四月一日

下總國佐倉町鏑木九十七番地

橋 詰 孝 一 郎 拜

この程のむづがりの時さへ
福にあつたり沛厚情のほ
ご謝と云き詞もさへ其後
熱もさへと預痛もさへしど
数日念ひたらあつたおと
病身からした基りなるおと
あつたつに癒養を加ふ
ごきる主治醫のすまへおと
かごぐ不存意もさへ今回の
學期試験はさへつはさ
いらたあまの別紙念書はさへの
先をさへさへさへさへ

数日念ひたつてゐるおれは
病苦方々に甚くなるおれは
有りつづつに癒養を加ふ
べき主治醫のすゝめあり
かゞ不存意多う今回の
學期試験はげつしは
にたまたま別紙尾書は
先生おれは出づる
青田君より回忌の諸氏に
おれ願ひあるおれ

三月十五日
加藤英雄

幸峯 治殿

貴下

《筒封の紙手の通普》
てもお

らう

佐倉中學校にて

五十嵐只次殿

貴下

酒々井にて

加藤英雄

十二月十五日

(七)

注意

○郵便にて差出さる手紙の封筒には、差出人は其名のみを、宛名の人の名は、その姓のみをかき、宛名の人の名のみをかき、これに反して、差出人はその姓のみをかき、宛名の人の名のみをかき、禮にあらざるものに候ふ。

Handwritten signature in cursive style, likely reading '加藤英雄' (Kato Hideo).

らうの(きがは)

杉田新梅花全散きりて
 散歩かきりて後
 けりておぼしめし
 けりておぼしめし
 けりておぼしめし
 けりておぼしめし
 二月十日

注意 ○まき紙にかく時の如く、描及び左右に餘白をとるに及ばず候ふ。
 ○鉛筆又はインキにてかくは、このましからぬことに候ふ。

てもおの(きがは)

神田區猿樂町八番地
 大山代助殿
 本郷區真砂町十七番地
 田村二郎

注意 ○脇付は、かきずともよろしく候ふ。
 ○印章を汚さぬやう、注意せられたく候ふ。

口語を文語になほす時の注意

ます

候ふ

例 雨降り候ふ

ました

候ひき
て候ふ

例 雨降り候ひき
雨降りて候ふ

普通に過去を現はすにも、現在の候ふを用ゐれども、正確にいはずには、候ひき、又は、て候ふなどを用ゐざるべからず。

ませう

候はむ
べく候ふ

例 雨降り候はむ
雨降るべく候ふ

ますなれば

候はゞ

例 雨降り候はゞ

ますによつて

(既定) 候へば

例 雨降り候へば

「候はば」と「候へば」とは、未定と既定との相違あり。例へば、「雨降り候はゞ困難に候はむ」、「雨降り候へば困難に候ふ」とは「へど」、「雨降り候はゞ困難に候ふ」、「雨降り候へば困難に候はむ」とは、いはぬが如し。(文法書「將然段と已然段との誤」を参照すべし)

ますけれど

候へども
候へど

例 雨降り候へども
雨降り候へど

「候へども」を「候得共」とかくはよろしからず。必ず右の如く書くべし。(ハ行四段の動詞の已然段に「ド、ドモ」の添ひもしのなれば)

ますから

候ふにつき
候ふ間

例 雨降り候ふにつき
雨降り候ふ間

ますによつて

候ふまゝ
候ふ條

例 雨降り候ふまゝ
雨降り候ふ條

同じ手紙のうちに、間、付などの文字を、二つ以上用ゐるはうるさし。まへの如く、殆ど、同意義の語、あまたあることなれば、よく注意して、耳障りにならぬやうすべし。

ますのに

候ふ處

例 雨降り候ふ處

ましたのに

候ひしに

例 雨降り候ひしに

まするか

候ふや
候ふか

例 雨降り候ふや
何日雨降り候ふか

如何、何、いづく、いつく、誰などいふ語の下には、いつもかといふ疑問の助辭を用ゐるが國語の法則なれば、たとひ、これまでのまきたりなればとて、「如何に候ふや」、「何ほどに候ふや」などかくへからず。

ませぬ

候はず
ず候ふ

例 雨降り候はず
雨降らず候ふ

まするさうな

候ふ由
候ふ趣

例 雨降り候ふ由
雨降り候ふ趣

以上は、たゞ「ます」「候ふ」とつきてのみいへり。若し「御座います」「ならば、御座候ふと」、「申します」「ならば申し候ふと」、「下さいます」「ならば、下され候ふ」といふ類、推して知らるべし。

中學書翰文範

橋詰孝一郎著

一 入學を報ず(舊師のもとに)

小子事、去る十日當地着、直に、某中學の入學試験に應ぜし
ところ、幸に合格いたし、十五番の成績にて、今日、入學つか
まつり候ふ。これもひとへに、師の君日頃の御薫陶に基す
る處と感謝し奉り候ふ。先は、とりあへず、これのみきこえ
上げたく、餘は後便にゆづり申し候ふ。

二

三

御心配にあづかりし、中學校へ入學の儀は、撰抜試験の結果、幸に入學をゆるされ候ふ間、御安心なし下されたく、實は、本年の志願者は四百餘名にて、定員より二百餘名の超過故、いかゞあらむかと危ぶみをりしが、十五番の成績を志めて望を達し候ふこと、思へば、みな恩師の教に基くところと、感銘にたへず候ふ。先は、とりあへず、これのみきこえ上げたく、時節柄、申す迄もなけれど、御自愛のほどいり上げ候ふ。

(注意) 父兄、又は舊師の許などにつかはす時には、長上に對する禮をかくべからず。

類題

試験の成績を報ず

父兄の許、舊師の許、または、學友の許などに、わが成績を知らする手紙なれば、成績の良否は勿論、問題の難易などもかくがよかるべく候ふ。第一學期、第二學期は、何れも、氣候のたがへる時なれば、これまた、おもしろき趣向をめぐらすすけともなるべく候ふ。

用語

● 毎度懇篤なる御教訓にあづかり。● 疎音にのみうち過しをり候ふ罪、萬死もたらず候ふ。● 小生の成績は別紙の通りに候ふ。● 今回の試験は、問題意外にむづかしかりしたため、小生の學級などには、十三名の不合格者をいだしほどに候ふ。● 人の最もめんだうなりといふ、幾何の如きは、かねて先生の御教をかうぶりし甲斐ありて、今は生の長所のやうおもはれ候ふ。● 成績は、云はぬが花くらゐに候ふ。● 辛うじて合格いたし候ふ。● 平常點のあまりあしからざりしたため。● 證書授與式は、二十五日頃ならむと存じ候ふ。● 遺憾ながら、首席を人に譲り申し候ふ。

二 入學を賀す

一
中學校へ御入學の儀は、撰抜試験の結果、非常の良成績にて望を達せられ候ふよし、何よりのこと、遙に賀し上げ候ふ。申す迄もなく、今後は一層の御勉強を以て、いつも首席を占めらるゝやう、いのり上げ候ふ。

二

御文によれば、撰抜試験の成績非常によろしく、去る十日滞りなく御入學あそばされ候ふ趣、賀し上げ奉り候ふ。ただ、この上は、有爲の身を以て、邪道にふみ迷ふことなく、よく勉強よく遊びて、いつも首席を人にゆづらず、やがては、錦を着て故郷にかへらるゝやう、いのりあげ候ふ。

(注意) かゝる手紙は、祝ひの意を表するものなれば、行文、書方も、う

るはしくまた、むべし。かくて、文房具、書籍等を贈る旨かきとふるもよし。

類題

試験の合格を賀す

一年の苦學空しからず、五十の同窓の首位を占めて、學年試験の關門を通過したるをいはふものなれば、學友の許におくるつもりにて、また、められたく候ふ。

用語

●御手紙によれば、學年試験の成績御優等のよし。●かゝる良好なる成績を占め給ひしも、平素御勉學のいたす處。●兄の面目、御兩親の御悦びさこそと察し上げ候ふ。●いさゝか御よろこびのまるしまてに。●兄が目的の彼岸に一步を進めたるものと、御いはひ申しあげ候ふ。

三 世話になりしを謝す

拜啓、過日は御多忙のをりから、一方ならざる御世話にあづかり、御厚情のほど、ありがたく存じ候ふ。いづれ参上して御禮いたすべく候へども、とりあへず、書面にて謝意を表し候ふ。頓首。

二

拜啓、過日は、小子身の上のことにつき、御多忙のをりにもかゝはらず、種々御高慮を煩はされ、御厚情のほど謝すべき詞も存ぜず候ふ。御蔭様にて、頑父もやうやく遊學をゆるすことゝあひなり候ふ間、御安心なし下されたく、直さま御禮に参上いたすべき筈なれど、試験前のことゝて心にまかせず、失禮ながら書面にて謝意を表し候ふ。

(注意) かゝる手紙は、先方の厚意を謝するものなれば、かき方などは最も

丁寧にするべし。かの脱字を後よりいれ、または文字の配列をみだるが如きは禮にあらず。

類題

手傳をうけしを謝す

危難を救はれしを謝す

貴重なる時間を惜まず、一方ならぬ努力をいとせず、わがために手傳ひくれたる友の厚意は真心をこめて之を謝すべく、不慮の危難をみて、身を忘れてわれを救ひし人の親切は、また、赤誠を捧げてこれに報いさるべからず。この手紙をかくに、忘れてならぬことは、熱誠を以て謝意を表すべき一事に候ふ。

用語

●世の常ならぬ御厚情。●曝書のをりは御手傳なし下され。●懇篤なる御助力に預り。●思ひがけざる災難にかゝり。●貴兄の御たすけにより、虎口をのがれ候ふ。●御蔭によりて。●途上發病のをりは種々御介抱の上、馬まで御心配なし下され。●氣分はやゝ舊に復したれど、歩行などはいまだ意に任

せず。●いづれ平快次第参上いたすべきは勿論なれど、とりあへず御禮申し上げ候ふ。

四 身元保證を頼む

小生こと、こたび當中學校へ入學をゆるされ候ふ。つきては、規則により、在學證書に身元保證人を要する儀なれど、他に、志かるべき知己のなき身として、實にこまりいり候ふまゝ、是非貴下に御ねがひ申したく、失禮ながら別紙在學證あひそへ、書面にて御たのみ申し上げ候ふ。

二

過日は種々御もてなしを蒙り、ありがたく御禮申し上げ候ふ。さて、其節御話し申し候ふ中學の方も、撰抜試験の結果、滞りなく入學をゆるされ候ふ間、御安心のほどいの上り上げ候ふ。それにつき、御迷惑にも候はむが、身元保證を貴下にねがひ上げたたく、失禮ながら、別紙在學證書あひそへたのみ上げ候ふまゝ、身元保證人と志るせるところに、御記名御捺印なし下されたく、今夕小生よりいたゞきにまゐるべく候ふ。

類題

下宿の周旋をたのむ

人は、居處によりて、その心をうつすものに候ふ。學生の下宿をえらぶは最も必要なることに候へば、わが望む所をのべて、懇にその周旋を頼むがよかるべく候ふ。

用語

●只今の處は下宿人も多く、勉學には適せず候ふ間。●土地卑濕にて衛生に適せず。●他に引き移りたき考。●轉居のつもり。●御宅の近邊は土地も高

燥にて衛生にもよろしく。●少々物は不便にても閑静にて勉學に適し候はゞ。

●素人のうちにて、家人同様に衣食の世話をなし、一間を勉學の室に貸すと
いふが如きは、至極のぞむ處に候ふ。●勉學の暇には、庭をはき、水を汲む
位の手傳はいたすべく。●御心あたりも候はゞ、御世話なし下されたく。●
法かるべき處もこれあり候はゞ、御周旋願ひ上げ候ふ。

五 落第せし友人に

承れば、君には、こたびの學年試験の結果、おもしろからず
候ふよし、御残念のほど察しあげ候ふ。まかし、勇將は一敗
のために弓をすてずといふ格言もこれあり候へば、一層
の御奮發を以て、來學年には、必ず好成绩を定められ、今回
の失敗をとりかへさるゝやう願ひ上げ候ふ。頓首。

二

きくところによれば、兄がこたびの成績は、おもしろから
ず候ふ趣、いかばかり御残念のことならむと、蔭ながら察
し候ふ。されど、失敗は成功の基なりと聞く。一度挫折した
るものが、非常の奮發を以て事にあたる時は、かへりて、小
成に安ずる輩を凌ぐ例も候ふなれば、試験の失敗位は、決
して落膽するに足らざるものに候ふ。今後は、一層御勉勵
あそばされて、良結果を來學年にあらはさるゝやう、ひと
へに希望いたし候ふ。

(注意)

かゝる手紙は先方の失意を慰め、それがために業を半途にやめざる

やう、奮起せしむるが本意なれば、よく親切に友人たる情をこめて、

自暴自棄せぬやうに、おだやかに諫むるがよし。故に滑稽の語句、

(一三)
氣にさはるいひざまなどは、注意してまげざるべからず。

類題

廢學せむとする友人の許に
轉校せむとする友人の許に

用語

●兄には學業を廢し、實業につかむの御志とか。●轉校のおぼしめしなりとか承り候へども。●一應の道理なきにあらねど。●かくてはこれ迄の苦學も、なかば水泡に歸する次第にて。●さばかりの事情のために廢學するは、この上もなき遺憾と存じ候ふ。●孟母斷機の昔も忍ばれて。●各其校風といふもこれあり候へば。●これを草木にたとふれば、あしたに前庭にうゑ、夕に後圖にうつすたぐひにて。

六 遠足に友を誘ふ

一週間の春季休業を、むなしくくらすむも、本意なき次第に候へば、この際、房總の海岸へ、遠足をこゝろみむはいかに。かねての御約束もこれあり候ふまゝ、兄の御同行願ひ上げたく、御都合御伺ひ申しあげ候ふ草々。

二

かねて御約束の遠足の儀、この春季休業の間にこゝろみむはいかに。一抹の霞遠く漁村をこめて、沙白く松青き長汀曲浦に、浩然の氣を養はむは、きはめておもしろきことに候はずや。日子は往復四日の豫定にて、まづ陸路上總の海岸をたどり、安房の北條に出で、そこより汽船に乗り東京にいたり、墨田の花に吟ずる都合に候ふ。幸ひに、御差支

もこれなく候はゞ、御同行願ひたく一寸御伺ひ申し上げ候ふ。頓首。

(二四)

類題

避暑に友を誘ふ

五句の休暇は、學生の心身を休養すべき時に候ふ。汗と暑さとを敵として、四疊半裡に苦しむは策のえたるものにはあらざるべく候ふ。場所と友とをえらびての避暑は、極めておもしろきことに候へば、この手紙は、頗るかきよきものと存せられ候ふ。

用語

●三伏の暑を書齋の中にすごさむも本意なく候へば。●四句の休暇を、玉なす汗のうちにおくるも、おもしろからず候ふまゝ。●箱根の如き、鎌倉の如き、避暑には最もよき地なれども、昨今は既に都人士のために占領せられて、紅塵の巷と化せしならむと存じ候ふ。●某地は、某郡の山奥にて温泉もあり、瀑布もあつるよしなれど。●海に近く、山にも遠からず。●新鮮の魚介に富み。●實に夏なき里と考へられ候ふ。●せめて二週間も滞在いたしたく候ふ。●未だ世人に知られざる處とて、物價もやすく人氣もきはめて質朴に候ふよし。●ある寺の一間を借り、自炊を試みむも一興かと存じ候ふ。

七 同返事

一

一週間の春季休業を空しくするは、實に本意なきこと、思ひをりしに、房總の海岸に遠足を試みむはいかにとの御文、大賛成に御座候ふ。この分にては、天氣もつゞくならむと存せられ候ふにつき、明日にも出發いたしたく、いづれ、今夕參堂の上、萬事御うちあはせ申すべく候ふ。

二

往復四日の豫定にて、松青く沙白き長汀曲浦に遠足を試

(二五)

み、浩然の氣を養はむとのおぼしめしにて、わざわざ御誘ひ下され御厚情の程謝したてまつり候ふ。實は、生も如何にして、この春期休業をすごさむかと、考へをり候ふ際なれば、是非御ともつかまつるべく、いづれ夕方は參上、萬事御うち合せ申すべく候ふ。

類題

避暑にいざなはれし返事(「避暑に友を誘ふ」の用語を参照よ)

夏をよそなる地に暑さを避け、有益に五旬の休暇を送らむとの意にて、誘へる友の親切は、實に感謝すべき事に候はずや。この手紙をかく人は、この厚意を無視せざるやうにせらるべく候ふ。

用語

- 磯の松原に、ハンモックつるもおもしろかるべく。●其地の絶景なることは、かねてよりききをり候ふ。
- レーマチスのためにも宜しからむと存せられ候ふ。
- 避暑をかねての轉地療養。
- 一應父にも相談したく。
- 父も快くゆるされ候ふ間。
- かの地は、昨年兄のまゐりし所にて。
- 物價も極めてやすく候ふ山。
- 學生の避暑地としては此上なき地方。

八 約束をことわる

一

今日にいたり、かゝることときこえ上げむは、實に不本意の儀なれど、父事、昨日より腹痛烈しく、醫師の診察を乞ひしに、この二三日は、注意して看護せよとのことゆゑ、御約束の遠足には、遺憾ながら御ともいたしかね候ふまゝ、悪しからず御了承なし下されたく候ふ。

二

かゝるべしとは夢にも知らず、遠足の事、御約束申したりしが、父事昨夜より例の病に襲はれ、一兩日は看護を怠ら

ざるやう、醫師よりの注意もあり、かたゞ遺憾の極ながら、長汀曲浦をめぐることかなはず候まゝ、あしからず御洞察なし下されたく候ふ。實は生も、ほゞ旅行の用意までなしつるを、おもへば残念のいたりに候ふ。

(注意) かゝる手紙は、よく其理由を明にし、先方の感情を害せざるやう、遺憾ながら断らざるをえずとの意をえるすをよしとす。志からざれば、違約といふ點より、友人の信用を失ふに至るも是るべからず。

類題

招待を辭す

違約を謝す

違約は、徳誼上甚だおもしろからぬものなれども、萬やむを得ざる事情より、敢てすることなしと云ひがたし。また、厚意を以て、われを招くに、これに應ぜざるも情に於て忍び難きことなるべし。この邊のこともよく考へてかゝざれば、この手紙は死にたる手紙となるべく候ふ。

用語

- 御愛招にあづかり。● 寵招を辱うし。● 席末をけがしたき心得なりしに。
- 盛宴に陪したく考へ居たりしに。● 親類に發病せしものあり。● 御承知の件につき今日出京の都合に候ふ間。● 悪しからず御諒察なし下されたく候ふ。
- 旅装を整へ門を出てむとせしをり、某氏急病の報に接し。● 違約のすがたとなりし罪はのがれがたく候ふ。● 違約の罪をとがめず、遺憾をさほめ居る生の心事をあはれまれたく。

九 花見に友を誘ふ

一

南郊の梅花、今をさかりに候ふよし、散歩かたゞ一覽いたしたく候へども、おぼしめしは如何に候ふか。明日は學校も休課のことなれば、御同行願ひたく候ふ。草々。

鶯の音はまだきこえねども、南郊の梅は早や笑ひそめ候ふ由、さては、暗香うごくあたりに逍遙を試み、學窓の積鬱を慰めむも、おもしろからむと存じ候ふ。兄にはさるおぼしめしの候はずや。御同感にも候はゞ、明日午後より、小宅まで御いで下されたく候ふ。

(注意) かゝる手紙は、「なる程面白からむ。われも一所に行きてみむ。」と、先方の同意をうるやうに書くがよし。「辨當はこなたにて調へむ。」などかきとふるも妙なり。

類題

観櫻に友を誘ふ

紅葉見物に友を誘ふ

あへて、世の閑人を學ぶにあられども、花下に一日の逍遙を試み、紅葉の陰に半日の散策をほし、いまくにするは、いはゆる、自然の美に接し、精神を養ふものなるべく候ふ。この手紙の如き、よき趣向をめぐらさば、み事になるべきものをうるも、容易ならむと存せられ候ふ。

用語

- 十里の長堤花白きあたり。●今をさかりの櫻のもとに、霞か雲かをうたふはいかに。●夜の間の雨もあとなくはれ。●朝日ににほふ色香も一志ほと存せられ候ふ。●夕日てりそふほどは、全山もゆるが如しとのことなれば。●四月の花よりも紅なりとのこと。●あらしのねたみなさ間に。●一人して見むも興なし。●君とともならばと存じ候ふまゝ。

一〇 花を贈る

やうやく咲き出でたる小庭の梅花、兩三枝まゐらせ候ふにつき、御大人様御清翫の料として、御をさめ下されたく

候ふ。

二

前庭の梅、やうやく咲きいでたれど、鶯ならでは訪ふ人もなき山里のこと故、小子のみにてながめむも、面白からず候ふにつき、兩三枝高覽に供し候ふ。御床の隅にてもさしおき下されなば、花も必ず嬉しとほゝゑむならむと存ぜられ候ふ。

(三)

類題

朝顔を贈る

七草を贈る

勉學の餘暇、花の培養に心をを用ゐるは、おもしろきものに候ふ。この心づくしの結果を友におくるは、最も、趣味あるおくりものに候へば、これに添ふべき手紙も、亦、趣味多きを貰ふは云ふまでもなきことに候はずや。

用語

●家づとに折りたる草花。●技ぶりおもしろからねど。●始めて培養せしものなれど。●葉柄の長さより、牡丹咲は出来るよしに候ふ。●つるべの古きものに植ゑしは、千代の句によりしなり。●前約にそむくも不本意なれば。●配置の拙なることを笑ふことなく。●おもひの外の大輪なれば。●紅白の二種御めにかへ候ふ。●七草には三草たらねど。●朝の白露と、夕の蟲の音とをそへざるは口をししく候ふ。

一 一 種子の分配を乞ふ

昨年御つくりなされ候ふ西洋草花、本年は小子も、培養いたしたく候ふ間、種子の餘分もこれあり候はゞ、少々御めぐみ下されたく、願ひ上げ候ふ。

(三)

賢弟の御話によれば、君には珍しき草花の種子を藏せらるゝ由、今年は、小生も、秋の樂みとして栽培を試みたく候ふまゝ、近頃心なき願なれど、樂みを友にわかつかおほしめしにて、餘分もこれあり候はゞ、量の多少にかゝはらず、是非御惠投にあづかりたく候ふ。

類題

山吹をもらひに遣る
蓮花をもらひに遣る
菊をもらひに遣る

花を貰ひにやるは、一面より云へば、心やさしきやうなれど、一面より考ふれば、實に、心無き極みに候ふ。されば、その心なき所を咎めず、心やさしき所にめて、惜しき一枝を、惜しげもなく折らしむるほどのかきふりは、この手紙に必要なことにこれあり候ふ。

用語

- 心なきやうなれど。●寫生を試みたく候ふまゝ。●御氣の毒の至りなれど。
- 御庭の山吹。●雨後の色香。●御泉水の蓮花、今をさかりに候ふよし。●紅白の二種御めぐみにあづかりたく候ふ。●御培養の白菊。●明日は天長節に候へば。●御眞影のまへにさしげて、聖壽のひさしさをいのりたく候ふ。
- 亡き母の靈前に供へたく。●御心づくしの一枝を折りてとは、いひにくき所なれど。

一二 同返事

御所望にあづかり候ふ草花の種子は、あまり珍しきものにも候はねど、數種さしあげ申し候ふ。直に床をつくり、御蒔きつけなされ候はゞ、やがて發芽いたすべく、苗となり

てよりの手入は、小生參堂の上、御話し申すべく候ふ。

二

御所望にあづかり候ふ草花の種子は、昨夕蒔付を終へしばかりにて、今は一粒の残りもなく候ふ。實は、小生も、昨年始めて作りしものにて、逸品こそ無けれ、種類は數多これあり、花の盛りには、いさゝか前庭に飾るに足るのみならず、培養に心を盡す間には、まらずく植物學上の智識を得るものに候へば、苗にてさし上げ申すべく、手数はかゝり候へども、秋の眺めには、黃菊白菊、これも、御根分け申し候うてもよろしく候ふ。先は御かへりごとまでに、草々。

(注意) かゝる手紙には、與ふべきものならば、快く與ふべき旨を書き、與ふることを得ざるものならば、よく其事情を明にし、先方の人に、

もの惜みしてなど、疑はれぬやうにすべし。

類題

花を所望せられしに、「花を贈る」を参照すべし。

心づくしの一枝を折りて、友の満足をかふもよきことなるべし。ことに、畫題にせむとするが如き、或は、植物研究の資料とせむと云ふが如きに對しては、友人の情として、むしろこれが便益を與ふべきものならむと存じ候ふ。

用語

● 軒端の梅。● 垣の山吹。● 後園の櫻。● 春におくれぬ色を御目にかけて候ふ。
● 色香を深くめてさせられ。● 枝ぶりの賤しげなるをも捨て給はず。● 挿花の料としては、おもしろからぬ枝ぶりながら。● 花漬など御つくりなされ候うてはいかゞ。● 名は唐めきたれど、花はやさしく。● 西洋にては非常にもてはやさるゝものよし。● 君が畫題に入るは、花にとりて無上の名譽ならんと存せられ候ふ。

一三 採集を試むるとて(友の許に)

二日つゞきの休暇を利用し、同好の學友數名と、筑波に採集旅行を試むる約なりたち候ふ。されど、かねてより、この道に熱心なる君を、一行の中に加へぬは、甚だ、不本意のいたり候ふまゝ、特に、急使を馳せて、御同行を乞ひたる次第に候ふ。幸に、御賛成をえば、一同の満足、この上なきことに候ふ。

二

同行の友數名と約し、この、二日續きの休暇を以て、例の採集旅行を筑波に試むる筈に候へども、御同行のおぼしめしはこれなく候ふや。きけば、かの山には、「クマガロサウ」ア

ツモリ「サウ」の如き珍しきものもすくなからず候ふよし、この道に熱心なる兄が指導の下に採集するを得ば、一同の便益、この上なきことゝ存ぜられ候ふ。ことに、山北なる「山尾」は、柘榴石の産地として有名なるものに候へば、歸りにはそこにも立寄る豫定にて、すでに、同地の學友に、案内の勞をとられむことを頼みおき候ふ。幸に、兄の御賛成を得ば、一同の満足これにすぎたるものなく、明朝八時の出發に、一層の元氣を加ふるならむと信ぜられ候ふ。

類題

採集の同行をすゝめられしに

用語

●近頃の快事と存じ候ふ。●最も有益なる御企てに候ふ。●捕蟲網も持参し

たく。●先頃某氏の食蟲植物を發見したる地なれば。●寧ろ生より同行を願ひたき程に候ふ。●盆栽とすべきものをえむが爲め、家兄も同行を乞ひたきよし申し居り候ふ。●撮影旅行として某氏もまゐらむとのこと。●目的は異り候へども、これもおもしろかるべく候ふ。●かの地には、東道の主たらしむべき知人もこれあり候ふ。

一四 標本の交換を乞ふ

拜啓、御地方には「ナガハノイシモチサウ」あまたこれあり候ふ趣、標本として御採集のもの御持合せに候はゞ、御惠贈にあづかりたく候ふ。こちらよりは、かねての御望みにまかせ、「シラネアフヒ」ツガザクラの二種、別封としてさしあげ候ふ間、御をさめおき下されたく候ふ。

二

拜啓、別封の標本數種は、さき頃、筑波山に試みし採集旅行のえものに候うて、あへて、珍しきものにも候はねど、前約に従ひて、御めにかへ申し候ふ。この中なる「ユアツモリサウ」は、足弱の美少年某氏が、男女川の邊に於て得たるものにて、「クマガヒサウ」は、學校第一の剛の者、かく云ふそれがしが、御幸が原附近にて手に入れたるものに候ふ。いづぞやの御話によれば、御手許には、食蟲植物のおもしろきものこれあり候ふよし、交換と申しては、語癖あるやうに候へども、斯道研究の資として、是非、御惠投の榮をになひたく候ふ。

類題

繪はがきの交換を乞ふ(繪はがきにかきて)

(三二)

用語

●この橋、この流、皆、君が思出の種なるべく候ふ。●都には見るべからざる平和の景に候はずや。●こは、わが家の藤だなに候ふ。●毎日、ハンモックつりて愛讀の書を繙くはこの緑陰に候ふ。●御返事は、繪はがきにて御つかはし下されたく。●五百の健兒を養へるわが中學は上圖の如き建築に候ふ。●毎月一回づつ、繪はがきを交換するもおもしろかるべく候ふ。●自筆のゑはがき。●兄が得意の寫生畫に近作の歌一首をへられたく。●後園の葡萄、圖の如くなり候ふ、この色の紫水晶のやうにならむ時は、兄が歸省せらるゝ時なるべく候ふ。●木ぶかき杉の間より、あけの玉垣のほの見ゆるも、いと神しき眺めに候ふ。●老松もの云はねど、とふ人をして、懷古の涙に咽はしむるは、このかけに候ふ。●停車場をいでて、第一にわが足を入れしは、この公園にて、噴水池邊の茶亭にいこひ、そこにてこのはがきを求め、直に、筆とりたるものに候ふ。

一五 寫眞に添へて友の許に

一

其後は、疎音にのみうちすごし居り候へども、御變りもなく御勉學のこと、遙に賀しあげ候ふ。さて、この寫眞は、極めて粗末のものなれど、近頃撮影せしものに候ふまゝ、御高覽に供へ候ふ。座右の友と御ながめ下され候はゞ、辱なかるべく候ふ。

二

雨の夕、風のあした、いかに過させ給ふらむと思ひ出でぬにはあらねど、翼なき身の悲しさには、百里の山河にへだてられて、徒に其方の空をながめやりつゝ、握手快談を試

(三三)

みし昔を思ひいづるよりほかなく、心細き中に二度の春をむかへ候ふ。去る十日花見の歸途、かゝる折にも君と俱ならばと、ひとしほ悲しさに迫られ、せめてもの心やりにと撮影せし寫眞、粗末のものなれど、花下月前、座右の友として御いつくしみをこひたく、こゝに高覽に供へ候ふ。なほ御文の序に、君のも一葉御惠投のほど願ひ上げ候ふ。時節柄、いふ迄もなければ、御自愛あらせられたく、餘は後便にゆづり候ふ。不備。

(注意) 親睦の意は、朋友間の手紙の上に缺くべからざるものなれど、かゝるものにはありては、ことに然りとす。をりにふれて、手をたづさへし昔を思ひいづるよしをいひ、こなたの様もかたり、彼方の様もとふなど、かき方にもいろ／＼あるべし。

類題

久しくあはざりし友の許に

朋友の親みは格別のものなり。まかも、山河百里をへだて、久しく相見をなえざる時など、その戀しさも一方ならざるべし。雨そ、夕、雁の音遠くきこゆる夜など、俄に思ひ出でて、その近況を問ひ、わが現況を報ずるは、いとおもしろきことならずや。生氣ある手紙は、かゝるもの、中よりえらるゝものに候ふ。

用語

●例の筆不精にて。●さのふ今日とのみ思ひ居しに。●月に語りしも去年の今頃かと思はれ候ふ。●萩の上風たゞならぬ夕。●故山を忍ぶ夢さめて、孤雁の聲を枕近くさくをりなど。●はし居して、月を待つをりなど、君を思はぬにあらねど。●露ばかりの御つゝがもなく。●草の枕に二たびの秋をかさね給ひしなど。●生も恙なく眠食を貪りをり候ふ。●冬期休業などには、一度御歸省なされてはいかゞ。●人事の上にはかはりしこと多けれど、青山舊容をあらためず、流水昔のまゝに清く候ふ。

一六 同返事

(三六)

美しき寫眞、御惠み下され、久々にて御勇壯の御すがたに接し、親しく拜顔をえたる心地いたされ候ふ。小子のも、不日さしあげ申すべく候ふ間、これ將た座右の友と、御志たしみ下されたく、今より願ひ上げ候ふ。

二

花下月前、君と、もならばと思はぬ日としては候はねど、御同様な山河に隔てられては、握手快談を試むるよしもなく、心細き月日をあかしくらしつるに、こたびは、美しき寫眞御贈り下され、久々にて勇壯なる御すがたに接し、親しく拜顔をえたる心地いたし候ふ。生のは、きはめて不出來なれど、過日撮影せしもの一葉、たゞ健かなるおもかげのみ、御覽にいれむの心にて、さし上げ候ふ間、御をさめ下されたく、御承知の通り、目下試験前にて、とかく忙しく候ふま、ま、きこえ上げたきことも、大方後鴻にゆずり候ふ。拜復。

類題

久しく逢はざりし友より、安否をとはれしに

かゝる手紙に於て、友の間はむとする所は、多くわれも間はむとする所なるべし。故に、彼の近況をふことに力をつくさむよりは、われの近況を語るに心を用ゐば、友を満足せしむるほどのものとなるべく候ふ。

用語

●其後のことは、皆夢のやうにおぼえ候ふ。●私こそかへりて疎情を極めをり候ふところ。●思ひながらも疎音に過し。●わざ／＼御芳簡をよせて、起居の御尋ねにあづかり。●ひるは中學に夜は私塾に通ひをり候ふ。●英語は

(三七)

かねてより君の長所なりしを、昨今にいたりてはめきめき御熟達のこと、察し上げ候ふ。●夏期の休みには、歸國の考なりしが、數學の講習會ありしため、それに入會いたし、ますます疎音をかさね候ふ。

一七 遊學せる友人の許に

花の都の春のにぎはひ、さこそと察し上げ申し候ふ。承れば、こたびの學年試業には、好成绩を去められ候ふ趣、日頃御勉學のいたすところと何よりうれしく存じ候ふ。當方の試業も、この十五日よりはじまる筈なれど、例の學才に乏しき小生には、合格もおぼつかなく、更に安き心もなく候ふ。とにかく、本月下旬には、父ととも上京する都合に候へば、花白く水清きあたりに、一日の快談を試みむも、遠からざること、今より樂みをり候ふ。

二

柳も萌え櫻も咲きて、都の春の錦、如何ばかり美はしからむと、遙に思ひやられ候ふ。御文によれば、此度の試業は非常に好結果のよし、兄の御面目は更にも言はず、御兩親の御悦びはた世の常なるまじく存じ候ふ。當方の試業も、この廿五日に終る筈なれば、其成績により、かねて御手数を煩はしつる中學へ、入學するつもりにて、來月上旬、父同道にて上京する都合に候へば、花白き墨田の堤上、一日の逍遙を俱にし得るも、遠からざること、今より樂しみ居り申し候ふ。頓首。

類題

故郷の友人に

(四〇)

なつかしきは郷里の山水なり。ことになつかしきは郷里の竹馬の友なり。鎮守の森、門の小川、
軍遊びの昔をまのび、めだかおひし過去を追想すれば、その竹馬の友のおもかげは、直ちに目
前にうかぶものに候はずや。されば、この友に封くる手紙は、必ず、詩的趣味に富める、おも
しろき文字より成ること存じ候ふ。

用語

●空のさまも日毎に春めさわたるにつけ。●昔釣たれし小川の柳ももえたら
む。●手をたづさへてながめし、鎮守の森の櫻も咲きたらむ。●君と遊びし
昔も老のばれて、故郷の戀しさもひとまほまされるをりから。●別にみるも
のとはなけれど。●春期の休みを幸ひ、御いでなされては如何。●御いで
なさるべしとのこと。●手をたづさへて花かげに歌はむ日も近からむ。

一八 醫師の許に(來診を乞はむとて)

父事今朝より腹痛烈しく、困み居り候ふにつき、雨中御迷
惑にも候はむが、御來診を煩したく、御藥籠はこのものに
御つかはしの程願ひ上げ候ふ。とりいそぎ草々。

二

昨夜は、御みまはり下され、御厚情のほどありがたく存じ
候ふ。御投藥のかひありて、五時間餘安眠せしたためか、病人
も殆ど苦みを忘れしやうなりしが、今朝にいたり、またま
た患部に痛みを發し、苦痛にたへざる様子に候ふ間、實に
勝手がましき儀に候へども、このものと御同道にて、直に
御來診なし下されたく、偏に願ひ上げ候ふ。頓首。

類題

薬もらひにつかはす

(四一)

診断書の認め方をたのむ

用語

- 内用の分、服しをほり候ふ間。●外用の分、みなになり候ふまゝ。●御調劑の上。●御蔭様にて。●病勢益々よろしき方にて、熱度も毎夜と變りなく。
- 只今の處、平熱より六分ばかり高く候ふ。●内服の分だけ、御投薬をこひ、いづれ後ほど御回診を煩はしたく候ふ。●一週間以上の缺席には、診断書をそへて届け出づる校則に候ふ間。●御手数ながら。●恐れいり候へども。●御見込。●今後何日間療養を要するむね、御志たゞめ下されたく候ふ。

一九 病氣見舞

御父上様御病氣のよし承りしが、此頃はいかゞに候ふか。日頃御孝心深き兄が御心配、さこそと推察いたし候ふ。

さゝか御見舞の志るしまでに、ビスケット一罐、御目にか
け候ふ間、御納め下されたく、いふ迄もなけれど、御看護等、
御注意あらせらるゝやう、いのり上げ候ふ。不。

二

御親父様御病氣の趣、御心配のほどはいふ迄もなく、御無
人の中、如何ばかり御困りなさるゝならむと、察し上げ候
ふ。今朝、今井國手の話によれば、一週間もたゞば平癒すべ
しとのこと故、氣候不順の際、一層看護に心をつくさるゝ
やういのり上げ候ふ。この品、在京の友より貰ひしものな
るが、滋養に富める新菓に候ふまゝ、御目に向け申し候ふ。
先は、とりあへずこれのみ。

(注意) かるき病人には、懇ろに療養すべきよしひ、やゝ重きものには、

其家族に對し、いふ迄もなけれど、看護に心をつくさるべきこと、
氣候あしければ、御心配も一まほなるべきことなどいひ、見舞とし
て贈るべき物品は、滋養にとめる、菓子、鶏卵、水飴、葡萄酒など
よろし。書方は、病氣のよしあしもよくわからぬ時は、うすき墨に
てかき、名宛だけこき墨を用ゐるなり。いづれにせよ、かすり字な
どを忌む。

類題

負傷せし友の許に

用語

- 不慮のことより御負傷あそばされ候ふ趣。
- 御落馬のため。
- 銃器御手入の際。
- 不幸中の幸と申すよりほかなかるべく候ふ。
- 経過よろしく候ふ由。
- 右の足を折られしとのこと。
- 治療よろしきを得ば、一週日後にて舊に復せらるゝやうさゝをり候ふ。
- 野球競技の際、打撲傷を受けさせられ。
- 右の眼の下とのことなりし故、一時は驚き入り候ふ。
- 決して無理のこととはなさらぬがよろしく候ふ。
- 生れもつかぬ不具の身躰となる人すらこれあり。

二〇 全快を報ず

一

かねて、御心配にあづかりし父の病も、日にまし快方にむかひ、昨今は床をはなれて、新樹の梢をめぐるやうあひな
り候ふ間、御安心なし下されたく候ふ。草々。

二

父病氣の折は、再三御尋ねにあづかり、ことに御見舞とし
て、何よりの品御惠投なし下され、今にはじめぬ御厚情の
ほど、謝すべき詞もこれなく候ふ。御蔭さまにて、いかゞあ
らむと心遣ひし病も、日にまし快方にむかひ、昨今は、起居

にも人手を要せず、日中などは縁先に出でて庭の新樹を
めづるやうあひなり候ふまゝ、御安心あらせられたく、と
りあへずこれのみきこえ上げ候ふ。頓首。

類題

床上の祝に人を招く

床上の祝に赤飯をおくるとて

用語

- 一時はこの世のものと思はざりしが。●御蔭様にて、長々の病氣やうやく
全快いたし候ふ。●日毎快方にむかひ。●殆ど舊に復し。●御もてなし申す
べき佳肴はなけれど。●床上祝。●志ばかりの祝盃をあげたく。●床上の赤
飯。●實は御招待申すべき筈なれど。●御多忙の際、却りて御迷惑ならむと
存じ候ふまゝ。●混雜のうち、かへりて失禮になり申すべしと考へ。●粗末
なる料理。

二一 缺席届の差し出しかたをたのむ

この程は、わざ／＼の御見舞に預り、御厚情のほどありが
たく存じ候ふ。病氣は、お蔭様にて、やゝ快方にむかひ候へ
ども、衰弱なほ甚しく、こゝ五六日間は、とても昇校いたし
かね候ふまゝ、別紙の缺席届、受持の先生まで、御さし出し
下されたく候ふ。

二

このほどは、わざ／＼の御來訪を煩はし、御厚情のほど、謝
すべき詞もなく候ふ。その後、熱もさり、頭痛も癒えたれど、
衰弱なほ甚しく、こゝ數日は、特に心を用ゐて静養すべし

と、主治醫よりのすゝめもあり、かたゞ不本意のいたりには候へども、この學期試験には、缺席するつもりに候ふまゝ、失禮ながら、別紙の届書、受持の先生まで、御さし出し下されたく、同窓の諸氏へも、志かるべく御傳へのほど願ひ上げ候ふ。草々。

類題

傳言をたのむ

買物をたのむ

用語

- 御序でと申しては失禮ながら。●御道よりにはありかたがた。●御昇校のをり。●御歸りの節。●叔父の家。●叔母の許。●別封の手紙一通。●持ちづらきものにて、さぞ御迷惑にも候はむが。●至急を要するものにて。●無

人のをりから、直にまゐるべきものもなく。●近日御出京のよし。●本郷邊まで御序もこれあり候はむ。●美滿津商店製造のボールーガス。●書籍の購入方御頼み申したく。

二二 缺席がちな友人の許に

一

この頃は、久しく御出席なきやうなれど、何か家事の御都合ありてに候ふか。或は、御病氣などにやとも案じられ候ふ。とにかく、學校を休むは、御同様あまり好ましきことにも候はねば、一寸御伺ひ申し上げ候ふ。謹言。

二

久しく御出席なきは、御病氣のためとのみ思ひ居りしに、きくとところによれば、つまり閑遊に、其日をおくらせら

れ候ふ趣、如何なる御考かは存ぜねど、平素思慮深き兄にも、似合しからざること、考へられ候ふ。今更申す迄もなきことながら、青年は人生の春に候へば、この折に其培養を怠らむには、美しき果實を收めむことは、到底覺束なきことに候はずや。志かるに、身を學籍につらね居る兄が、盛に培養すべき春をよそにして、いはゞ、人生の冬に、爐邊の閑遊とも云ふべき、圍碁などに耽けらせらるゝは、決して策の得たるものには候ふまじ。この邊、篤と御考へなほしの上、學校へも御いてなされ、餘暇を以て閑遊を試み給ひてはいかゞに候ふらむ。行きてかへらぬは光陰、先にたゝぬは後悔とも申せば、おもひちがひなきやう、ひとへにいのり上げ候ふ。一片の友情もだしがたくて、申し進じ候ふことなれば、失禮の字句はいくへにも御見ゆるし下されたく候。

(注意) かゝる手紙は、最も親切に、先方の不心得をさとすやうにせざるべからず。かの滑稽にわたり、又は過激にすぐるがため、かへりて悪感情をおこして、自暴自棄にをはらしむるが如きことありては、おもしろからず。

類題

- 不養生なる友を戒む
- 不品行なる友を戒む
- 浪費する友の許に
- ひそかに喫煙する友の許に

笑ふ時とともに笑ふのみが、眞の朋友にはこれなく候ふ。泣くべき時に涙をわかつ程の情誼あらず、友の過を戒むる位は、さまての難事にはあらざるべく候ふ。不品行なるもの、浪費するも

の、やがては、一身の方向をあやまるものに候へば、赤心を以て、その不心得をとき、その反省を促すは、友情の最も美しき所にこれあり候ふ。

用語

●御勉強にのみ心をよせられ。●たえて運動などにいで給はずとのこと。●巻を取るべき手に、さかづきをもち。●学校にはこぶべき足を、いつも酒樓にむけ。●文机の許に古人を友とするのみにては。●美しき智識は、健全なる身體ならでは、やどらざる道理なれば。●火のなき處に烟はあがらぬわけなれば。●それがために、病氣などひきこしたまひては。●世人の信用をうしなひ。●父母に對しても、不孝の罪はのがるまじ。●かゝることは、生がいふ迄もなき事なれど。●無益のものに多分の金銭を費され候ふ趣。●多分の金銭をすて、無用のものをもとめられ候ふ趣。●風説をそのまゝの事實とはとりがたけれど。●根もなきことならむとはおもはるれど。●なほひそかに喫煙したまふやの噂もこれあり候ふ。●喫煙をやめ給はず。●學生として、果してよみすべきことに候ふや。●父兄の膏血に衣食する身の行ひに

候ふや。●法律の禁をやぶりて、省みざるが如きは、君がためにとらざるところに候ふ。●無益の金を費すには、無益の時間も費ゆる道理。●青年の身をあやまるも、多くは浪費に基するものと信じ居り候ふ。●修業中の不自由は、御同様忍ぶべきことかと存せられ候ふ。●学校にても、かたく禁じたること。●煙にせよとて、小づかひは興へぬことと考へられ候ふ。●ひいては、學校の名にもかゝはり候ふ次第。●其筋の人の眼にふれ候はゞ、煩ひを父兄にまで及すべく。●まかし、過ちとしては、極めて小なるもの。●この過ちをだに、改められ候はゞ、好青年の前途ますます多望なるべく。

二三 雨ふる日友を招く

この雨天にては、かねて御約束の郊外散策も、いかにともいたし難く候ふにつき、學友を小宅に會し、何かれもしる

き話など致したく、おほしめしは如何に候ふか。昨日、東京なる兄の許より、おくりこしたる新刊の雑誌なども、數種これあり候ふ間、別に御さしつかへもなくば、直に御いで下されたく候ふ。

二

昨日の、うらゝかなりしにひきかへ、今朝は、軒端に玉水の音まげく、かねてより樂み居し郊外散策の企ても、水泡に歸したるなど、御同様遺憾のことには候へども、徒に天の無情をかこちて、この一日を空しくせむも、亦不本意のいたり候へば、親しきものを小宅に會し、おもしろき話に徒然を慰めたく候ふ。兄にも何とぞ御來臨あらせられたく、待ち上げ奉り候ふ。

類題

春夜友を招く

秋夜友を招く

落葉風なきにみだれて、箒聲遠くきこゆる夕、萩の上露月をやどして、蟲聲湧くが如き夜、ここに會心の友とへだてなきものがたりに、清典か窓にするは、實に、愉快のことに屬す。われらの學校生活の歴史中に、永く、後の思出たるべきものは、たしかに、かゝる夕におこりし出來事候はむか。

用語

- 庭前の櫻今をさかりにて。
- 月に清香ありて花に影なく。
- 實に一刻千金の良夜に候ふ。
- 御さしつかへもなく候はむ。
- 御前約もこれなく候はむ。
- 今宵も月はおもしろからむ。
- 蟲のねも清く。
- 庭の芝生に坐して、やり水より月の流れくるをまつも。
- 母が自慢の栗飯をさしあげたく。
- 明日は休日候へば、すこしは夜を更し候うてもよろしかるべく。

二四 同返事

何か、おもしろき話に、雨中の徒然を慰めむとの御文、あり
難く拜誦いたし候ふ。生も實はいかにして、この一日を暮
さむかと、惑ひ居し折からなれば、直に參上、御邪魔いたす
べく候ふ。拜復。

二

思ひがけなき今日の雨にて、かねて約束の散歩も試むる
によしなく、天の無情をかこち居し折柄、何かおもしろき
話に、この一日をおくらばやとの御文、徒然の情を慰めむ
には、此上なきことゝ存ぜられ候ふ。或は御迷惑にも候は
むが、道の序なれば、花見氏をも誘ひ、直に推參いたすべ

候ふ。先は御返事迄に。

類題

春夜友の許にまねかれしに

秋夜友の許にまねかれしに

用語

- わざ／＼御手紙下され。●御庭の櫻今を盛りに候ふよし。●月の影も香に
にほふらむと存じ候ふ。●近頃の御名吟御うかゞひかた／＼。●山水の美を
恣にし給ふ御住居は、月のながめもひとしほならむ。●生も夕刻より、君を訪
はむと思ひ居し折なれば。●一枝の笛を手にし。●手風琴をたづさへ。●御
言葉に従ひ。

二五 洪水見舞

一

連日の降雨にて、某川あふれ、御地方は居宅へ浸水せしむ
きもこれあり候ふとか。兄が此頃の御缺席も、或はそれが
ためにはあらじかと案ぜられ候ふ。幸に、さしたる御被害
もなく候ひしか、御うかゞひかたゞ、御見舞申し上げ候
ふ。敬具。

二

霖雨のため某川溢れ、沿岸の地には、浸水の害を蒙りし處
も多しと承る。御地などは、さしたることもなく候ふや。御
住宅は、居ながら白帆をのぞみ、遙に漁歌をきくあたりと
承りをり候ふまゝ、この二三日御出席なきに思ひ合せ、何
となく心もとなく、御見舞かたゞ、御うかゞひ申し上げ
候ふ。

類題

暴風見舞

用語

- 近年まれなる暴風。●樹をたふし。●垣根のたふれしもの、やねのやぶれしもの。●別にさしたる御被害もなく候ふや。●作物の被害も多少ある見込。●人手を要することなど候はゞ、御遠慮なく御申し越し下されたく候ふ。●とりあへず、下男二人さしつかはし候ふ間、まかるべき御用も候はゞ仰せつけられたく候ふ。●御住居は高さ處故、一層風のあたりも烈しかりしならむ。

二六 螢がりを催す

一

納涼かたゞ、夕刻より螢がりはいかゞ、石川のあたり、こ
とにまげしときゝては、例の癖とゞめがたく、御誘ひ申し

上げ候ふ。

(六〇)

二

石川の螢、例年より去げく、青柳夕風になびくあたり、闇をぬひてとびかふさま、實におもしろしとのこと、一夕の復習を廢し、納涼がてら學窓の鬱を慰むるも、亦決して無益にはあらざるべし。樂みは衆と共にするに去かずとか。御同遊を得ば、何よりうれしかるべく候ふ。

類題

紅葉狩を催す

わらびとりに友を誘ふ

氣清き暮秋の一日を、錦織りなす山におくり、長閑けきやよひの半日を、雲雀なく野にくらすは、また、おもしろきことに候ふ。故にこの遊びをともしすべきを誘ふ手紙は、友の遊意を動かすばかりの力あるが肝要に候ふ。

用語

●なが雨もやうやくはれ。●このごろの雨にて野外の春色、一まほの美をそへたらんと存じ候ふ。●郊外の秋色も、一まほの眺めなるべけれど。●雉なく岡の邊に蕨をあさるもおもしろからむ。●松に交れる紅葉の色も、捨て難く候ふ。●紅葉がりを試みむはいかに。●山里の友人より紅葉のさかりを報じ來り候ふ。●散歩かたがた。●時間はやくば、某處の花もみたく。●林間紅葉をたきて、酒をあたくむるまでならずとも、あさりえたるきのことを炙りて、茶を煮るくらゐの興味はあるべく候ふ。

二七 螢を贈る

一

石川の螢、籠とともに進上いたし候ふ。軒の忍草シノクサの露ちる夕、御令弟様、御愛玩の料にも供せられなば、うれしく候ふ。

(六一)

二

車胤が昔を學べとは候はねど、石川の螢籠とともにさしあげ候ふ。軒の小鈴に涼しき風かよふ夕、學窓の御なぐさみにもあひならむかとして。

類題

鈴蟲をおくる

小鳥をおくる

用語

●月にあくがれて西郊にいてしに。●昨夜までは、野邊の露に、なきたるものなれど。●小萩がもとなきぬしすゝ蟲。●なく音すてがたく、草葉をわけて、十ばかり捕へかへり候ふ。●御望にまかせさし上げ候ふ。●かねて御約束のかなりや。●このほどやうやく巢たち候ふまゝ。●餌食も少々さし上げ候ふ。●昨日捕へし眼白、聲もよく候ふまゝ。●餌としては、焼きたる甘

薯、うみ柿などよろしく候ふ。●水は毎日かへられたく。●籠は御かへし下されたく。●籠も御つかひなされ候ふてよろしく。

二八 水泳に友を誘ふ

一

納涼かたゞ、水泳はいかに。鹿島橋のも、寺崎橋のも、一昨日より教授をはじめしおもむき、御同感にも候はゞ、直に御ともいたしたく候ふ。もはや、日課の復習をもをへられたることゝ存じ候ふまゝ、御いざなひ申し上げ候ふ。

二

水泳教授と書ける小旗、一昨日より寺崎橋畔にかゝげられ候ふよし、かゝるあつき日は、水のおそびもかへりて興あらむと存ぜられ候ふまゝ、日課のをへたるを幸ひ、御い

ざなひ申し上げ候ふ。御同遊のおぼしめしも候はゞ、幸な
るべく候ふ。

(六四)

類題

月夜舟遊に友を誘ふ

用語

●今夕は三五の良夜。●陰曆の中秋に候へば。●月もおもしろからむと存せ
られ候ふまゝ。●舟を湖心に浮べて月を賞したく候ふ。●月に棹さして某川
に遊びたく候ふ。●蘇子の昔を學びて、十六夜月に棹さしたく。●既に同志
のもの數名これあり候ふ。●兄の同遊をえば、ひとしほおもしろからむと存
じ候ふ。●舟中各得意の詩を吟じ、歌を咏ずる筈に候ふ。●各月にちなみあ
る食物をたづさふる筈にて、城畔氏は栗、春夢氏は團子、小子はもなかを用
意いたし候ふ。●おぼしめしも候はゞ、兄にも何か御用意願ひたく候ふ。

二九 夏の頃友人の許に(近況を問はれしに答ふ)

食後の散歩に、夕月の涼しきをふみ、只今歸宅いたし候ふ
ところ、久々にての御文に接し、おもしろく拜誦つかまつ
り候ふ。生も、例によりて恙なく候ふまゝ、御安心なし下さ
れたく、學校の方も、規模極めて小に、生徒の數多からぬは、
御承知の通りなれど、校長をはじめ、諸先生とも、皆熱心な
る人たちにて、よく諸生の薰育に力を盡され候ふため、規
律の嚴肅なると、成績の佳良なるとは、いさゝか誇るにた
らむかと信ぜられ候ふ。體育の方も、すこぶる盛なるもの
にて、目下、擊劔とベースボールとが、専ら行はれ居り候ふ。
ベースボールは、先頃某中學との選手競技にやぶれしか

(六五)

ば、この大暑をも意とせず、毎日運動場にたちて、練習に餘念なき有様、會稽の恥を雪ぐも、遠からざること、考へられ候ふ。擊劔の方にては、太田君、沼澤君、あひ變らずの元氣にて、五十嵐君などの上達、實に驚くばかりに候ふ。なほ、申しあげたきことも、あまたあれど、暑中休暇も近づき居り候こと故、其折、拜面を得てと、かきもらし候ふ。頓首。

(六六)

二

加藤君と食後の散歩をともし、南郊の月をふみて、只今歸宅いたし候ふところ、久々にての御文に接し、さながら拜顔を得たる心地いたされ候ふ。生も、例によりて恙なく、昨今は運動家の一人として、あばれ居り候ふ間、御安心なし下されたく、學校の方も、新しき校長來任せられ候ふ以來、益、規律を嚴肅にせられ、諸先生も、皆熱心なる人達にて、よく諸生の薰育に心を用ゐられ候ふため、殆ど在來の面目を一新したるかの感これあり候ふ。されど、都に近き地には、えてある習ひとして、一種の悪書生と交りを結び、折學校の禁をやぶりて、處罰せらるゝ輩あるなど、實になげかはしき次第に候ふ。現在の生徒數は百八十餘名、校友會と申すは、その團體に候うて、文學部及び體育部の二にわかれ、文學部にては、毎月一回例會を開き、いつも、演說、討論、文章の朗讀などを行ふさために候ふ。體育部は、目下、劔術と、ベースボールとを練習中にて、生徒は、必ず其一を撰ぶべき規定に候へば、運動の盛なること云はむかたなく、なかにも、ベースボールは、先頃某中學との選手競技に敗

(六七)

をとり候ふため、一同臥薪嘗膽のをりから、昨今の酷暑を
 もいとはず、運動場にはバットをふるふもの絶えず、會稽
 の恥辱すゝがてやはの意氣ごみ、まことに、すさまじきも
 のに候ふ。劔術の方には、沼澤、太田の兩君、あひ變らずの勇
 將として、すこぶる元氣よく、五十嵐君なども、めきくの上
 達にて、目錄以上の腕前たしかなりとか聞きおよび候
 ふ。とにかく、第一學期試験の後、各種の陸上運動を催す筈
 に候へば、其をりの様は、また、詳しく御報知申しあぐべく、
 このほかのことも、其時にと筆を止め候ふ。頓首。

(注意)

かゝる手紙は、ありのままを詳しく書き連ぬるをよしとす。されば

先方の人に報じて、さしつかへなきかぎりには、自身の上のみならず、

友人の上までかくもさまたげなし。

類題

郷里の近況を友人に報ず

用語

●鐵道の開けしより、花の頃はさすがに都の人まわり候ふ。●目下、田の
 植付時にて、菅の小笠をもるゝうた、おもしろくきこえ候ふ。●製茶に忙は
 しく。●實業家多忙の時。●養蠶も已に四眠にかゝり候ふ。●早きものはす
 でに上簇したるもこれあり。●本年は、意外の大漁にて至極景氣よく。●避
 暑の客多く入りこみ候ふため、旅店など何れも景氣よく候ふ。●收穫の時と
 て、農家の忙しさ云ふばかりなし。●十日の祭禮も、今年は例になく、華や
 かに行ふよしに候ふ。●新築の學校も、やうやく落成し、近々開校式を擧ぐ
 る筈に候ふ。●青年の墮落をふせがむため同志會といふを組織し、新聞雜誌
 の縦覽所を設くる計畫なり。●條約改正の餘澤は、草深き田舎にも、碧眼紅
 毛の人を見らるゝにいたり候ふ。

三〇 海水浴に行きし父の許に浴衣を

おくるとて

一

海邊のことゝて、あつさも格別おだやかに候ふよし、なほ、御心志づかに、御保養あらせらるゝやう、いのり上げ候ふ。仰せこされし浴衣は、本日、小包郵便にて發送いたし候ふまゝ、やがて、とゞくべきことゝ存じ候ふ。先は右御案内まてに。

二

此頃の暑さは、殆どたへ難きほどなれど、海邊はこの地とは違ひ、幾分か凌ぎよきことゝ存じ候ふ。申す迄もなく、青松白沙の間は、空氣もさわやかに、かつは新鮮の魚類もすくなからざることゝ察せられ候まゝ、御心志づかに御保養あらせられたく、家事むきは、母上と小子とにてさしつかへなくとりまはしをり候へば、御心配なきやう願ひ上げ候ふ。御申しこしの浴衣は、小包郵便にて、本日發送いたし候ふ間、御うけとり下されたく、御案内かたがた、これのみ申し上げ候ふ。

類題

避暑に行きし友人の許に

四歳半裡に暑さをかこつ人より、夏なき里に身心を養へる友におくるの書、趣味ゆたかなる文字をつらねらるゝは、疑ひなきことゝ存じ候ふ。

用語

●軒の小鈴の音絶えしをり。●庭の日扇、風にうごかず。●あつさ堪へ難き時も、落ち来る瀧は、なほ涼しき響をおくるならむ。●松高く苔滑かなるあ

たり。●夏なき里のあきふし、いかばかり涼しからむ。●白雲にいねて松風をやさし給ふらむ。●生は紅塵のうちに暑さをかこちをり候ふ。●玉なす汗拭ひもあへず。

三一 死を弔ふ

一 (子を亡ひし人の許に)

御令息某君、かねて御病氣のよしは聴き居たれど、さしたる御事とは思はざりしに、御療養のかひなく、昨十日、遂に御遠逝遊ばされ候ふ趣、いかに老少不定の世なりとはいへ、意外のことに、夢かとはかりたどられ候ふ。御生前、學術も優等に、温良成人の風ありし點も、今はかへりて長く忘れがたき、御兩親の御嘆きの種となりしなど、いとく口惜しきことに存じ候ふ。さて、實に輕少のいたりなれど、別封金一圓、いさゝか香華の料として、さし上げ候ふ。いづれ墓參かたゞ、參上いたすべく候へども、とりあへず御くやみまでに。

二 (父を亡ひし人の許に)

御父上様、御大病のよしは承り居しかど、いまだ五十の坂をも越え給はぬ御身の、平素も極めてすこやかにおはせしこと故、必ず御平快の日あるべしと期しつるに、御遠逝の報に接し、夢に夢みし心地して、まこと、は思はれぬほどに候ふ。いまを盛りの御歳にて、人の信用もあつかりしに、それを誘ひし風のうらめしく存じ候ふ。日頃御孝心あつき兄が御嘆き、さこそと察し上げ候へども、それがために、却りて、御自分の健康を損ふやうのことは、ゆめく遊ば

さるまじく、是非なきこと、御あきらめなされ、あと懇に御弔ひ遊ばさるゝやう、吳々も願ひあげ候ふ。實は御くやみかたゞ、參上いたすつもりなりしが、御嘆きのうち、いかゞあらむかと、さしひかへ申し候ふ。別封の金子は、志ばかりの香華料として、靈前にそなへしものなれば、御納め下されたく、いづれ、其うち御墓參には罷り出づべく候ふ。

(注意)

死を吊ふ手紙には時候のあいさつは不用なり。たゞ「何某君御遠逝の趣」など、かさはじめてよし。書方は左右の餘白をせまくとり、うすき墨を用ゐ、他の用事などかさをへず、また「かへすく」「なほなほ」などの詞をさむべからず、但し、先方の宛名はこき墨にてかくも妨なし。

類題

死去を報ず

死は人世にありて、最も悲しむべきものに候ふ。この死を報ずる手紙は、云ふまでもなく行文、書方、ともに輕卒にすべからざるものに候ふ。

用語

●かねて病氣のところ、感冒の心地とのみ思ひ居りしに。●順天堂病院に入り療養中。●危篤におちいり。●藥石効を奏せず。●百方療養に力をつくししかひなく。●永眠につき候ふ。●遠逝いたし候ふ。●黄泉の客とあひなり候ふ。●遺言もありかたゞ、かたちばかりの葬式を營むはずに候ふ。●造花等の御寄贈は、遺言により御断り申し候ふ。

三二 法事に人を招く

拜啓、明十日は、亡兄の三年忌に候ふ間、志ばかりの、法事を行ふつもりに候へば、別に御もてなし申すべき珍味もあり

らねど、君は、亡兄生前の交際もあり、かたゞ御光來を煩
したく、御招き申し上げ候ふ。

二

拜啓、愚兄の永眠につきしは、なほ、昨日今日の心地のみせ
らるゝには、や明日は其三年忌とあひなり候ふ。つきては、
志ばかりの法會を營み、生前辱知の諸君を煩して、詩歌を
手向けいたしたく、御多忙の中、實に恐れいり候へども、午
後一時より、御光來なし下されたく、待ち上げ候ふ。

(注意) かゝる手紙は、人を招待するものには相違なけれど、「是非」とか「御
障りくり合せ」とかいひて、強ひて招くは禮に非ず。

類題

亡友の追悼會を催す

亡友の墓參に人を誘ふ

用語

- 亡高橋君のために。● 親交ありし學友あひ會し、君が生前の逸事など語り
たく。● 本月十日は、亡友某君の三週忌に候ふ間。● 某寺の別院をかりうけ。
- 追悼會あひ催したく。● 詩歌の雅會を開き、いさゝか追悼の意を表したく。
- 今日、亡友某君の初七日に候へば。● 松風寒さあたりに眠れる君もさす
がに、親しみし友はまつならむ。● 親しかりし友の手向くる水ばかりは、地
下の人も、よろこびてうくるならむと存じ候ふ。● 永眠につきし友を、某山
寺に弔ひたく。

三三 法事にものを贈る

明日は、亡御令兄のため百日の法會を營まるべしとの由、

御招きに来たがひ、必ず参上いたすべく候ふ。さてこの時菓一籠、失禮ながら御使をわづらはして、さしあげ候ふ間、御靈前に御さゝげ下されたく、くれぐれも願ひ上げ候ふ。

二

御手紙によれば、故青山君のために、法會を營まるべしとの御こと、遺靈もいかばかりか悦ばるゝならむと存じ候ふ。この品きはめて粗末のものなれど、いさゝか、靈前に手むけむの心にて、さしあげ候ふまゝ、御をさめ下されたく、明日は必ず参上して御回向いたすべく候ふ。

類題

手向の花を贈るとて

用語

●亡利一君の御靈前に、手向けられたく候ふ。●この萩は、某氏御在世の頃、萩が岡より堀り來りて、ともに小庭にうゑしものなるが。●このほどやうやく咲きいて候へども、花さかば俱に眺めむと約せし友は、この世をはやくして。●思へばきのふのことは夢の心地いたされ候ふ。●幽顯所を異にするもの、生前の約もありかたく。●墓前に劔をかけし、古人の心もかくやありけむ。●この一枝は、せめてもの、手向心にさし上げ候ふ。

三四 茸狩の賛成をもとむ

八街の友より、茸狩に來よとの手紙まゐり候ふ。明日の日曜を、みどりの松陰にくらすおぼしめしはなく候ふや。一日のえものを以て、茸飯をつくるもおもしろからむと存ぜられ候ふまゝ、御賛成をえたくて、御誘ひ申し上げ候ふ。

八街の初茸、今をさかりとき、及び候ふ。松のみどりこまやかなるあたり、たけにあまる尾花おしわけつ、一日をくらすむも、ちか頃の快事かと存ぜられ候ふにつき、同窓の人たちを誘ひしに、みな同意を表せられ候ふ。なかに、栗山氏は、かの地に叔母君のあるを幸ひ、場所其他につき、種々の便宜をはかられ候ふ間、いよく、この日曜を以て、決行すること、さだめ候ふ。別に、御差支もなく候は、兄にも、御同遊いかゞに候ふか。當日、辨當の料として、各自白米五合、松魚節一づゝをたづさへ行き、あさりえたるえもの、に合せ、岩間行く水をくみ、松の落葉かきあつめて、きのこ飯をつくらむの心がまへに候ふ。先は右御誘ひまで。

類題

栗狩の遠足に賛成をもとむ

遠足の時、は来れり。天高く、氣清き日、郊外に、いづれば、そこには、尾花まれき、栗笑へり。友と一日の健脚をためさむには、うる所の家づとに、弟妹を悦ばすをうべく候ふ。

用語

●千草野。●蟲の音ひるもさこゆるあたり。●芝栗の名所に候へば。●いたる處に栗はこれあり候ふよし。●輕装、朝霧ををかして出發せむ。●花のみならず、秋の野邊には栗も笑へりとか。●ふみこぼれたるを拾ふもおもしろからむ。●十五夜の樂みにいたしたく。●天たかく馬こゆるとき、栗狩の遠足に、一日を費すもおもしろからむ。●空しくこの頃の一日をすごさむも本意なく。

三五 栗をおくるとして

後園の栗、多みてこぼれたるを拾ひ、少々さし上げ候ふ。夜學のをりなど、一つ二つづつ、火鉢にてあぶるも、眠氣をふせぐには、至極妙ならむと存じ候ふまゝ。

二

夜のまのあらしにて、前庭の草花は見るかげもなくなりしかど、後園の栗の多くこぼれたるは、思ひがけぬ幸ひにて候ふ。栗めしは、君の好物のよし、かねてきゝをり候ふまゝ、粒の大いなるものをえらび、わづかながらさし上げ候ふ。なほ、長夜の御なぐさみの料としては、また其うち。

類題

菓物を友におくる

猿蟹の昔がたりの頃植ゑたる柿の、やうやく果を結びたるもすてにおもしろきに、之を、昔話よくかたりし叔父におくれば、そのおもしろさいかばかりに候ふらむ。此の類題をよるこゝくるも、また趣味あることに候はずや。

用語

- 後園の柿、やうやく熟し候ふ間。
- 小庭の蜜柑、この程より、黄金の色にあひなり候ふまゝ。
- 枝ながら、少々さし上げ候ふ。
- 御高覽に供へ候ふ。
- 父が、培養に心用ゐしほどありて、味も、昨年よりはよさかと存じ候ふ。
- 自贊が、味しく候へども、形及び味とも逸品と存じ候ふ。
- 君が畫題にいるべきもの。
- 枝ふりよきを選びしは、君が水彩の筆とる料にと思ひてなり。
- 繪と胃とは國音の近きことなれば、いづれにても、君が意にまかすべく候ふ。

三六 留守をたのむ

一

本日、例の用事にて出京、凡、一週間ほど滞在すべき都合に

候ふ間、御迷惑にも候はむが、不在中は、萬事御心添へ下されたく、頼み上げ候ふ。

二

生事、某學校の入學試験に應ぜむがため、今日より凡二週間ほど、某地に滞在すべき都合に候ふ。不在中は母のみ故、萬事御世話なし下されたく、ひとへにたのみ上げ候ふ。

(注意) かゝる手紙は、人の手数を煩はすものなれば、事ながらを明かにかきて、懇にたのむがよし。

類題

曝書の手傳を頼む

用語

●例年の曝書。●藏書のむしぼしいたしたく候ふ。●大暑のをりから御氣の毒のいたりなれど。●實に申しかね候へども。●今明の兩日。●別に御さしつかへもなく候はゞ。●御都合よろしく候はゞ。●御たすけ願ひたく。●曝書の御手傳ひ御たのみ申したく。

三七 旅行先より友人の許に

一

小子出發の際は、種々御厚情にあづかり、ありがたく存じ候ふ。なれぬ旅路のいかゞあらむかと氣遣ひしが、五日の途上、露ほどの障りもなく、只今、當地につき候ふまゝ、御安心なし下されたく候ふ。おもしろきことゞも多少ありたれど、そはいづれ、歸國の上నికిこえあぐべく候ふ。

二

袂をわかちし時は、さすがに心細かりしが、五日の道中つがなく、昨夕當地に着し候ふ。當地は、歴史上の舊蹟おほ

く、從ひて、三四日は見めぐる中に終るならむと存せられ候ふ。途中にておもしろく感じたることも少からねど、そはみな、歸國の上にてと、うち洩し候ふ。

類題

安着を報ず

歸宅の日取を報ず

用語

●御地。●錦地。●滞在中。●遊覽の際。●御厚情。●御もてなし。●御優遇。●汽船にて。●汽車にて。●安着いたし候ふ。●來十日當地發。●歸宅は十四日の午後ならむと存じ候ふ。●さすがは有名なる地とて、商業などの盛なること驚き入り候ふ。●風景もよく。●佛寺などは、昔のまゝ存しをり候ふ。●試験の成績わかり次第歸宅いたすべく。●名所ほどつまらぬものはなく候ふ。

三八 土産物を贈る

一

不在中は、萬事御心添へ下され、ありがたく謝し奉り候ふ。只今、無事歸宅いたし候ふ間、御安心なし下されたく、この品つまらぬものなれど、かの地の名産のよしなれば、少々御目にかけて候ふ。いづれ、夕刻に參上して、いろく申し上ぐべく候ふ。

二

只今、つゝがなく歸宅いたし候ふ間、御安心なし下されたく候ふ。不在中は一方ならぬ御世話にあづかり、ありがたく御禮申し上げ候ふ。この品、いさゝかながら、御子様方へ

さし上げ候ふまゝ、御笑納なし下されたく、試験のことなどは、夕頃參堂、縷々御話し申すべく候ふ。

類題

遠方の友に名物を贈る

用語

- 珍しからず候へども。● 御口にはかなふまじく候へども。● かねて御好物のよし承りをり候ふまゝ。● かねての約束にまかせ。● 当地の名物。● 名物の焼鮎。● 名産の陶器。● 通運便。● 汽船便。● 小包郵便。● 御笑納。● 御笑味。● 筆にかはりはなく候へども、香取浦の蘆を用ゐしところあもしろく。
- 硯として、質はよろしからず候へども、某山よりいでし石といふところ珍しく候ふ。● 水晶の文鎮二つさしあげ候ふ。

三九 修學旅行の事につきて父の許に

御培養の菊、今をさかりのことならむと察し上げ候ふ。さて、先頃も一寸申しあげおき候ふ修學旅行の件、いよゝ天長節の翌日より、鎌倉の方面へ出發することにきまり候ふ。旅費は、貳圓位の豫定にて、横濱、横須賀等へもたち寄るよしに候へば、見聞を益することも多からむと信ぜられ候ふ。兒も同行いたし候うて、よろしく候ふや、費用としては、かねて頂き居り候ふ小遣のうちより貯へおきしもの一圓五拾錢これあり候ふ間、更に一圓だけ御めぐみにあづかり候はゞ、十分なるべく候ふ。草々。

二

承れば、もはや中稻のとりいれにかゝられ候ふ趣、さぞ御

多忙の御事ならむと察しあげ候ふ。いつぞやも、一寸申しあげおき候ふ通り、學校の修學旅行も、いよく四泊の見こみにて、鎌倉方面へまゐることにきまり候ふ。かの地は御承知のごとく、歴史上、一見のあたひあるべきは勿論、横須賀、横濱等へも立寄るよしに候へば、軍艦及造船の様子より、商業の状況等につきても、大に見聞を益することあらむと考へられ候ふ。百聞は一見にまかずとやら申すこともこれあり候ふ間、兒も是非この旅行には加はりたく、旅費は貳圓づつとの豫定に候へども、その一部としてはかねて頂き居り候ふ小遣の中より、月々貯金いたしおき候ふもの、一圓五拾錢ほどにあひなりをり候ふまゝ、更に一圓ほどの御めぐみを蒙らば、よろしく候ふ。先は右御ゆるしにあづかりたく、いそぎこれのみきこえ上げ候ふ。頓首。

類題

歸省のことにつきて父兄の許に

思出多き菟知の山川もなつかしけれど、それよりもなほなつかしきはわが家に候ふ。あたりは白雪に埋るゝ日も、そこには暖き風室にみち、膳に山海の珍なき夕も、一家まとゐの席には、いひ知らぬ樂みあるべく候ふ。遊子家をおもひてやまざるも、この樂の忘れがたきためなれば、歸省についてのこの文の如き、真心をこめてかゝむには、必ずよきものとなるべく候ふ。

用語

●冬のやすみは、御膝下にておくりたく。●この一月は、御ひざもとにて、雑煮の箸をとりたく。●故郷の山水なつかしく候ふまゝ。●なつかしき山川の夢に入る夜もすくなからず。●背戸の葡萄の味今にわすれがたく。●久々にて、母君御自慢のお萩もいたゞきたく。●久々にて弟にもあひたく。●松本君も御歸省のつもりに候ふよし。●廿一日より、やすみに相なり候ふ。

寄宿舎にて春をむかへ候うても、おもしろからず候ふまゝ。●よき道づれも
ありかたぐ。●遠足かたぐ某地をめぐり。●多分の費用はかゝらず候ふ。
●親しく御相談申したきこともこれあり候ふ。

四〇 修學旅行のさまを友人に報ず

一

かねてより、健脚のきこえたかき君が、この頃の御消息、さ
だめて、耳をかたぶくる値あるもの、多々ならむと察しあ
げ候ふ。生等も、去六日佐倉を發し、房州の西海岸に向て、五
泊の修學旅行を試み、昨夕やうやく歸りつき申し候ふ。途
中の失策談も、例によりてすくなからず、得たる新智識も、
多少これあり候へども、皆、別に添へたる紀行に記しおき
候ふ間、御笑覽なし下されたく、たゞ、東京館山間の汽船に
は、殆ど閉口、百餘名の同行者中、船ゑひを催さるるもの、わ
づかに數人のみにて、甲板上は足ぶみもならぬほどのあ
りさま、大に海國男子のねうちをさげ申し候ふ。今日は慰
勞としての臨時休暇に候ふまゝ、紀行の清書を終へ、筆の
序に、この手紙をまゝめし次第に候ふ。これより、脚絆や
ら、シャツやらの洗濯、貧書生の身は憐むべきものに候は
ずや。草々。

二

天氣清朗の好時節に候へば、鐵脚は、例によりて山河の跋
渉に忙はしく、この間の御消息、耳をかたぶくる値あるも
の、多々ならむと察しあげ候ふ。生等も、百餘の同窓と、も
に、別紙略圖の如き路をとり、去る六日佐倉を發し、東京、勝

山、佐貫、木更津、五井と五泊をかさね、昨夕やうやく歸りつき申し候ふ。旅は、つらきものゝ一なれど、また樂しきものの一なりとは、いつぞや、君の申されしことなるが、こたびの旅も、云ひかふれば、この一言とあひなり申すべく候ふ。まづ、初日は淺草の水族館、上野の博物館、馬喰町の宿につきても、日誌記すかたはらには、まめの療治しながら赤繩のおよぎ方や、象の鼻つきやら、笑ふやら、こぼすやらの騒ぎ、其夜は、よくも眠らであかし候ふ。二日目は、靈岸島より館山まで、汽船の便をかりしに、觀音崎の邊より、天候とみに變り、風いよく烈しく、浪いよく高く、船體の動搖一方ならざりしたため、鋸山を前に望みて、竹岡に向へる頃は、一行の人々皆生色なく、甲板の上は、足ぶみもならぬほどの有様、殆ど閉口いたし候ふ。中にも、下村君などは、最も苦みし一人にて、かく云ふ小生も、海國男子の資格を失ひしなかまに候ふ。かくて、館山につきしは、豫定より二時間もおくれたれど、すでに、宿泊地を勝山と定めおきしことなれば、北條にて晝飯をたゝめ、軍歌の聲に、一度挫けし勇氣をよびおこして出發せしに、那古にて日は全く暮れ、雨さへ降りいでしかば、辿り行く道のいや闇きに、南無谷小瀆のあたり、海に沿へる路は、浪の爲めに、なかば洗ひ去られ、墜道はいつぞやの雨にて崩潰せしところありなど、聞くに至りては、進退こゝにきはまり、いかゞはせむとためらひしに、なさけある人より、一つの提燈をめぐまれ、そをたよりに、辛うじて進みしものゝ、或は行潦に脛をうづ

めしもの、或は躓きてたふれしもの、一々數ふれば、五六にはとゞまるまじく候ふ。一體、このあたりには小山多く、那古勝山間のみにて、すてに、十數ヶ所の墜道あるほどにて、その山と山との間には、必ず海水の灣入せるなど、晝ならば、足をとゞむべき絶景もあり、つらむを、たゞ浪の音を聞きての夜の旅に、疲勞のみをまうけしは、かへすゞも遺憾のことに候ひき。去かし、一人二人にては、到底凌ぎ難き困難をも、あまた故に凌ぎ、一行をして、益團結心の必要を覺らしめしは、この日のたまものとして、長く記憶すべきことかと存ぜられ候ふ。この夜は、勝山に泊り、あくる日、鋸山の絶頂に、十州一覽の奇勝を眺め、東京灣の防備のよくだいたれるに驚き、佐貫の二見屋と云ふに草鞋をとき候

ふ。この地、もとは某氏の領邑として、其當時は、大分榮えし趣なれど、今は荒村の暮秋、一層さびしく、かたはらを走る千草川の流のみ、昔を語るやうに聞きなされ候ふ。柿は、この地の名産とやら、見るからに甘げなるもの、こゝかしこにならべあり候ふまゝ、食後、先生のゆるしを得て、一同、三錢づつ奮發せしに、武田君は、さすがに有名なるもの、直經二寸位のを十二たひらげしには、驚きいり申し候ふ。あくる日の鹿野山、たゞ、山のおもしろかりしのみにて、これぞと云ふ奇談もなく、木更津の一夜、五井の一夜、これまた無事と申すよりほかの詞を知らず候ふ。今日は慰勞のため、の臨時の休暇、お坊チャン連は、まだ寝てやおはすらむ、貧書生のわれは、脚絆やら、シャツやらの洗濯をへ、お茶一

服といふところを筆とり次第に候へば、なほ詳しきこととは、紀行を清書して後、御笑覽に供すべく候ふ。不備。

(注意) かゝる手紙は、實況をそのまゝに寫すをよしとす。多少滑稽のふしはありとも、決してとがむべきものにあらず。但し、長上に對しては、くれぐれも禮を失せざるやう心がくべし。

類題

運動會のありさまを報ず

開校式のありさまを報ず

開校式と云ひ運動會といひ、皆、學校生活の歴史中に在るべきものにして、いつれも、事實をありのままに記述すればよろしき譯に候ふ。中にも運動會は、學校の花とも云ふべきもの候ふ。へば、競技のある點につきては、多少の評論を試みるもおもしろかるべく候ふ。

用語

- 朝野の貴賓を會し、紀元節を以て陸上運動會を催し候ふ。●六百ヤードの競争は、當日第一のめざましきものに候ひき。●さすがの大運動場も、來觀の群集にて埋められ候ふ。●盲目球拾ひは、滑稽をさはめ候ふ。●餘興として笑品展覽會を催し候ふ。●校内には、生徒の製作品の展覽會をひらき候ふ。●學校紀念日につき。●新築の校舎、このほど、やうやく竣功いたし候ふにつき。●去る五日、盛大なる開校式を舉行せられ候ふ。●餘興として、競走、綱引、二人三脚等。●數番の陸上運動あり。●當日の來賓は、知事書記官視學官等をはじめ、縣下知名の士百餘名。●その順序は、別紙に印刷せる通りに候ふ。●見物の群集山の如く、小生も四百ヤード競走に一等賞をとり候ふ。●大風のため、提燈競走を中止せられ、失望せしものも大分これあり候ふ。

四一 わた入を贈られしに(兩親の許に)

一

寒さ日増しに加はり候へども、御兩親様には御かはりも

なくゐらせられ候ふよし、何よりうれしく存じ候ふ。私も、お蔭により、毎日元氣に通學いたしをり候ふまゝ、御安心のほど、いのり上げ候ふ。さてこたびは、冬着の料として、わたあつき衣類、御おくり下され、ありがたく拜受いたし候ふ。母様御手おりのおもむき、御病中にかくまで御心を煩はさるゝこと、涙もおつるばかり、勿體なく存じ候ふ。頓首。

二

埋火のもと、こひしき頃とあひなり候へども、御両親様には、流行の感冒にもをかされず、至極御達者に御過し遊ばされ候ふよし、何よりうれしく候ふ。兒もお蔭にて、つゝがなく勉學いたしをり候ふまゝ、御放念あらせられたく候ふ。さて、此度は、母様御手織のよしにて、絹あまた入りたる

綿入、及び黒の羽織、御恵みにあづかり、今にはじめぬ事ながら、御なさけのほど、ありがたく存じ候ふ。なみより弱き御身をも厭ひ給はず、かひこ養ふ業より、手を通す迄に、去あげられし御志のほど、思へば涙もおつるばかり、勿體なきことに候ふ。ことに昨年より、すこし長く御志たて下され候ふとや。年毎に丈のそだち行くも、みな御めぐみにほかならざる次第に候ふ。今更申すまでもなけれど、御老體の事故、時節柄、御自愛のほど、いのり上げ候ふ。頓首。

(注意)

父兄に對する手紙は、事の何たるを問はず、親愛の情紙面にあふるるばかりにかくをよしとす。かくするには、たとひ、作文として課せられし時も、實際必要ありて、父兄に對してかく手紙と思ひて、筆をとれば、必ず見るに足るべき文をうるならむ。かの「遊學のため上京を乞ふ」「書籍購求のため送金を乞ふ」などの類にいたりては、

よく事實を明かにし、懇に願はざれば、父兄は其子弟を愛するあまり、一時其所置に迷ふが如きことなしとせず。ことに注意してはじめの時候のことより、をはりの時節柄云々に至る迄、省略の筆法等を用ゐ、恩愛になれて禮を失ふことあるべからず。

類題

羽織を貰ひにやる

稽古着新調のために送金を乞ふ

用語

- 羽織も筒袖ならでは都合あしく。●角袖にては昇校をゆるされず候ふ。●母様御手織の丈夫なるもの。●毎度御手敷をかけ、恐れいり候へども。●昨年用ゐしものを、筒袖に御なほし下されたく。●雨のふるをりなどは、單衣のみにてはちと寒く候ふ。●ふだん着に候へば、絹のいりしものは無用に候ふ。●華美に流れ候うては、かへりてよろしからず候ふ。●こたび柔道部を設けられ候ふ。●體育の重んずべきは申すまでもなく。●私の如きかよわきものには、ことによりしく候ふよし。●柔道の如きは、覺えおき候うてもよきものなれば。●師範役は、東京にて有名なる某氏なれば。●稽古着を新調したく。●稽古着新調の料として、一圓五十錢ほど、御送金をあふぎたく。●來月分の學資とともに、御送金をし下されたく。

四二 かるたを贈るとして

一

極めて粗末の品なれど、新版の英語かるた、一組捧呈いたし候ふ。幸ひに、御令弟様、新年の御慰みともあひなり候はば、うれしかるべく候ふ。

二

新版の明倫かるたは、これ迄のと變り、遊戯の間に、人倫の

大道を教ふる趣向にて、家庭教育の資ともなるべきやう思はれ候ふまゝ、一組さし上げ申し候ふ。幸ひ、御令弟様、新年の御慰みの料にも供せられむには、何よりうれしく候はむ。

(注意)

人に物品などを贈る時は、たとへ、其物美事にて、珍しきにせよ、

粗末の品なれどとか、珍しからねどとかいひなすを、今日の禮儀とはするなり。

類題

双六を贈るとて

錦繪を贈るとて

繪はがきに添へて

用語

●御年玉のまるし迄に。●御慰みの料として。●西京土産として。●修學旅

行の際に求めたる名所の寫眞畫。●在京の友人より貰ひしものなるが。●立

志双六。●會話かるた。●幸便に托して、さし上げ申し候ふ。●小包郵便に

て、送呈いたし候ふ。●珍しとはあらねど。●某氏の眞筆にて、市井にひ

さぐものとは、聊か趣を異にし候ふ。●家兄自製の繪はがき。●米國の叔父

より貰ひし繪はがき。

四三 同返事

一

うるはしき英語歌留多、御惠み下され、御厚情のほど、あつく御禮申し上げ候ふ。弟どもの悦び云はむ方なく、學友を會して、日夜勝敗に餘念なく候ふ。

二

新版の明倫かるた、御惠贈にあづかり、御厚情のほど、謝し

奉り候ふ。直に一覽いたし候ふところ、皆人倫にかゝはれる歌どもを、あつめしものにて、家庭教育の資としては、この上なきものと存じ候ふ。弟どもの悦びは、たとへむ方なく、紙薦うちすておきて、學友とゞもに、日夜たのしみをり申し候ふ。先は、とりあへず御禮までに不備。

(注意) 人に物を貰ひし時の禮狀は、先方の厚情に報ゆるものなれば、書方行文ともに、十分丁寧に認むべし。また、返禮として物をおくるもよし。

類題

双六を贈られしを謝す
錦繪を贈られしを謝す
繪はがきをもらひしに

用語

●遊戯の間に、會話に熟せしむる趣向にて。●小包郵便を以て、わざ／＼御寵贈にあづかり。●御厚情のほど、謝すべき詞もなく候ふ。●さすがは眞筆のこゝとて、市井にひさぐものとは、大に趣を異にし。●新刊の雜誌二部、いゝさか御返禮として、御高覽に供し候ふ。●美事なる御自製の繪はがき。●御序の節、印畫法も承りたく。

四四 かるた會に友を招く

今夕は、小宅において、歌留多合戦を開かむ筈なれば、一方の將として、六時頃より兄の出陣を煩はしたく、待ち上げ奉り候ふ。

今夕は、花々しき歌留多合戦を、小宅に開く筈にて、已に二三の先着隊もこれあり候ふ。なかにも、某氏の如きは墨おしすり、腕さすりなどして、開戦を待つさま、實にいさましく、一時間後の奮闘さこそと思ひやられ候ふ。さては、平素驍名ある君が出陣を煩はし、一方の將とせむには、軍氣一層ひきたちて、至極おもしろからむと存ぜられ候ふ間、御賢弟御同道にて、直に御いで下れたく、待ち上げ候ふ。頓首。

(注意) かゝる手紙は、毎日逢ふ友の許などに遺すものなれば、氣候のあいさつをかくに及ばず。

類題

双六の遊に友を招く
福引すとて友を招く

用語

●學友數名を小宅に會し。●かねて御約束のかるた會。●心あへる友、よりあつまり。●雨はいづこもさびしからむと存じ候ふ。●勝ちし者には父より何か賞品を與へむとのことに候ふ。●姉君。●令妹。●賢弟。●御同道にて御入來なし下されたく。●五十個ほどの福引を用意いたし候ふ。●抱腹にたへざるものもこれあり候ふ。

四五 新年茶話會を催す

同窓の舊交をあたゝめむの心にて、明五日、午後一時より、新年茶話會を、小松屋に開くべき筈に候へば、君にも萬障御くり合せ、御來臨あらせられたく、御案内申し上げ候ふ。

二

拜啓、明五日、午後一時より、例年の通り、みはらし亭において、同窓新年茶話會を催したく候ふ間、君にも御出席あらせられ、心あひたる友と、半日の快談をこゝろみ給ひてはいかに。餘興としては、福引、劔舞などの催もこれあるべく、當日の楽しさは、さこそと存ぜられ候ふ。先は右御案内まで。

(注意) かゝる手紙は、友の賛成を得るが目的なれば、開會の趣意の如きも、其要領をばかきあらはし、懇に、同意を求むるやうにせざるべからず。左の類題の如きは、特に志かりとす。

類題

入營者のために送別會を催す

遊學のため上京する友の送別會を催す

恩師の榮轉に際し、其送別會を催す

用語

- ことたび入營せむとする人々のために。● 某君いよく遊學のため上京するよしに候へば。● 恩師某先生、ことたび中學校教諭に、轉任いたされ、この十五日、其途にのぼらるゝ筈に候へば。● 同志のもの申し合せ。● 同窓のよしみもあつかたぐ。● こゝに、送別の宴をはりて、其行を盛にしたく。● 御賛成なし下され、御貴臨のほど願ひ上げ候ふ。

四六 復習會を催す

一

學年試験の準備として、二三の學友を會し、英語、地理、歴史、數學等の復習會を催したく候ふ。おぼしめしはいかに。御同感にも候はゞ、場所及び時間のことなど、打合せ申した

く候ふ間、夕刻より、小宅まで御いで下されたく候ふ。

二

盗人を捕へて、繩をなふの誹りもあるべけれど、同志の者
数名にて、目前にせまれる、學年試験の用意として、諸學科
の復習會を開く筈に候ふを、おぼしめしはいかゞに候ふ
か。青燈親むべき候を、空しくせむも本意なく、かつは一人
とちがひ、研學上、長をとり短を補ふ利益も、すくなからざ
ることゝ存ぜられ候へば、御賛成の程、いのり上げ候ふ。但
し、期日、會場等は、この土曜日を期し、一同打合せの上、定む
る都合に候ふ。

類題

夏期講習會を催す

夜學會を催す

用語

●四句の休暇を、空しくせむも本意なく。●午前二時間、午後二時間、英語
と數學との講習會を開きたく。●某山寺の一室をかりうけ。●さすがに世を
はなれし山寺とて、松風の音は瀧の響と和し。●避暑に適し、また勉學によ
ろし。●已に同意の友も、二十餘名これあり候ふ。●夜はながきに、蚊軍の
來襲もなく。●同志を會し、夜學を催したく。●御同感にも候はゞ。●御さ
しつかへもなく候はゞ。●漁家を借りうけ、自炊いたしたく。

四七 書籍を借りにつかはす

過日參上の節、拜見いたし候ふ書簡文參考書、一讀いたし
たく、御不用に屬しをり候はゞ、一兩日間借覽御ゆるし下

されたく候ふ。

二

誠に申しかね候へども、御秘藏の史記評林、當時御不用に候はゞ、借覽つかまつりたく候ふ。實は、過日東京へ注文したるに、をりあしく品切にて、今後二週間をへずば、出來せずとのこと、學習上非常に不便を感じをり候ふにつき、それまでのところ、御かしおき下されたく、ひとへに願ひ上げ候ふ。

類題

道具をかりにつかはす

用語

●例の、文章會を小宅に開く筈なれど。●夜學會に入用なれど。●御大切の品、御氣の毒のいたり。●御不用の硯。●机の不用なるもの。●御言葉にまかせ。●仰せに従ひ。●暫時拜借願ひたく。●このものに御つかはし下されたく候ふ。

四八 書籍の直段を問合す

一

拜啓、貴店御發賣の中等作文辭典は、實價何程にて御賣捌に候ふか。御手数ながら、御知らせ下されたく、封入の三錢郵便一葉は、御返信の料として、そへたるものに候ふ。

二

- 一、歌がたり 金子氏著 一部
- 一、活少年 堀江氏著 一部

前記の書籍、御賣捌の實價及び郵送料等、不明に候ふ間、御

手数のほど、恐れいり候へども、御知せにあづかりたく、返信用としては、郵券一葉封入いたしおき候ふ。

〔注意〕 すべて、人に事を問ふ時の手紙、即ち回答を要するものは、簡明なるべきは勿論、先方の便利なるやう、要點だけ別紙にかくも妙なるべし。ことに多忙なる商家などへむけて發するものは、問ひ合すべき項目だけ、一々がきにし、結末の方へ、「右御回答を願ひたく候ふ」にても十分なるべし。

類題

書籍を注文す

用語

- 御發行。●御發賣。●一部購求いたしたく。●購讀つかまつりたく。●代價及郵送料とも、金二圓。●小爲替。●郵券代用にて送附いたし候ふ。●小包郵便にて御發送なし下されたく。●代金ひきかへの小包郵便にて。●至急

を要するものなれば、客車積にて御發送なし下されたく。

四九 同窓會を組織せむとて

其後は、音づれもせて、うちすごしをり候へども、例によりて、御勇壯の御ことならむと察しあげ候ふ。さて、いつぞや御はなし申しおきし、育英校同窓會の件、この秋は是非開會の運びに至らしめたく、在學中には、其交り兄弟もたゞならざりしものも、卒業せし後は、また一堂に會して、かたりあふことを得ずたゞ、疎遠のうち、月日をおくるが如きは、兄もかねてより、心よからぬことに申されたるところに候へば、この際は、發企者の一人として、十分御盡力の

ほど願ひ上げ候ふ。たゞし、假規約等のことにつきては、そのうち、小生參上御相談いたすべく候ふ。草々。

二

月に一度は、われも起居を報ぜむ、君も必ずなど約せしものゝ、わかれて後は、とかくのことに取り紛れ、思ひながらの疎音をきはむるは、御同様是非なきことかと存せられ候ふ。されど、三年なり四年なり、同じ學校に机をならべ、兄弟もたゞならぬ交ありしものが、卒業せし後は、また一堂に會してかたりあふことを得ず、たゞ、疎遠のうち、月日を送るは、まこと好ましからぬことに候へば、こゝに、同窓會を組織して、春秋二期の會合をはからむには、たとひ、一場の茶話なりとも、舊交をあたくめらるゝことならむと

考へられ候ふ。勿論、このことにつきては、生も全力を盡すつもりに候へども、兄も、是非、發企者の一人として、御盡力なし下されたく、なほ、假規約其他につきては、そのうち參堂、種々御相談申すべく候ふ。草々。

類題

幻燈會を催さむとて

討論會を開かむとて

用語

- 都の叔父より、みやげとして貰ひし幻燈。
- 最新式の大幻燈。
- かはりたる書も數十枚かひ求め候ふ。
- 動植及び歴史に關するもの百餘種。
- 辯論練習のたすけともならむか。
- 今日の世には、辯論の必要さはめて多く、從て、それを練習するは、決して、無益のことにあらざるべし。
- 兄の如き能辯家な
- くては何となくさびしく。
- 討論の題及び其順序は、別紙の通りに候ふ。

口角泡をとばす。●案をたいて、反對の説を主張するも一興なるべし。

(110)

五〇 人の宿所をとひあはす

拜啓、御令弟勇君は、當時、何處に御寄宿なされ候ふか。本郷とはかねて承り居れど、町名番地等不明に候ふ間、御手數ながら御志らせ下されたく候ふ。

二

其後は、疎音にのみうち過ぎ、誠に申譯なく候ふ。さて、御令兄には、昨今、いづくに御寄寓なされ候ふか。小生も、卒業試験の結果により、遊學いたしたく候へども、都の様子わかりかね候ふまゝ、御令兄を煩はし、萬事御伺ひ申したく、町名番地等、御知せのほど願ひ上げ候ふ。頓首。

類題

上京の日取をとひ合す

用語

- 少し御頼み申したき用事。●御上京の趣。●何日頃御出京なされ候ふか。
- 書籍購求方御依頼申したく。●御迷惑にも候はむが。●母も出京の都合に候へども、一人にては、さびしきよし申し居り候ふ間。●女の道づれば、さを御迷惑に候はむが。●ことによりては、小生も御同行願ひたく。

五一 入學の手續を問合す(友人の許に)

貴中學校の入學手續、不明に候ふ間、學年試験前、さぞ御迷惑にも候はむが、御きゝ合せの上、御志らせ下されたく候

(111)

ふ。草々。

(1111)

二

不順の節、御變りもなく御勉學遊ばさるゝこと、何よりうれしく存じ候ふ。小子も、試験の結果により、御地の中學へ入學いたすべき考へなれども、其手續等、不明のため困り候ふ。御手数数のほど實に恐れ候へども、校則及び寄宿費等、御きゝ合せの上、御志らせ下されたく、願ひあげ候ふ。

類題

學校の近況をとひ合す

用語

- 貴兄御在學の中學は、非常に評判よしとこのことなるが。● 校則もよく整ひ、生徒の監督も嚴重に候ふよし。● 小子も、是非入學いたしたき考なれば。● 寄宿舎の設けもこれあり候はゞ。● 御迷惑にも候はむが。● 入學試験の程度。● 日を追ひ隆盛のこととは存じ候へども。● 昨今の状況。● 校友會なども、大に振ふやにさゝ及び候ふ。● 體育などはいかなる様子に候ふか。

五二 同返事

一

御たづねにあづかりたる、中學校へ入學の手續は、規則書につき、御承知なしくだされたく、別紙郵送致し候ふ間、御熟覽の上、一日もはやく御いでのほど待ち上げ候ふ。

二

試験前、御多忙のほど、さこそと察し上げ候ふ。さて、御たづねにあひなりたる、中學への入學手續、直にきゝ合せ候ふ

(1112)

ところ、本年は一年級へ二百名の入學をゆるす趣にて、志望者非常に多き時は、讀書、作文、算術、習字等につき、撰拔試験を行ふよしに候へば、其御つもりにて、御用意あそばさるべく候ふ。志願の手續及び寄宿の費用等は、規則書にて御承知なし下されたく、別紙郵送いたし候ふ。先は貴酬までに。

類題

入學後、其學校の様子を友人に報ず

用語

- 學校の位置。●俗塵をはなれ。●遠く富岳を望む。●山を負ひ河にのぞむ。
- 職員は十五名ほどにて。●懇篤なる薫陶。●生徒の氣風は善良に候ふ。●
- 温良にして友誼にあつく、今の世に稀なるほど。●營利的のものにあらず。

- 生徒よりなれる同窓會あり。●ベイスボールは長技かと思はれ候ふ。●最近の校友會雜誌一部さしあげ候ふ。●目下特別教室の新築中に候ふ。●一ヶ月の學資は八圓半位にてたるべく候ふ。●寄宿舎は、百餘名の一大家族の如き有様にて。●一名の専任舎監を父といたゞき。●放任なる下宿に入るゝは、本人のためよろしかるまじく候ふ。

中學書翰文範 終

明治三十三年七月二十日印
明治三十三年七月廿五日發
明治三十八年三月十五日訂正八版印刷
明治三十八年三月二十日同發行

定價金拾八錢

著者

橋詰孝一郎

發行者

三樹一平

印刷者

石川金太郎

印刷所

株式會社 秀英舍

不許複製

發行所

東京神田區錦町二丁目
特電話本局二四三八番

明治書院

明治書院出版作文書類

落合直文先生 閣
森下松衛先生 著

訂正増補六版

中等作文辭典

クロース製 全二冊
定價金六拾五錢
郵税ヲ要セズ

本書は、作文の際、文字を探り、章句を練るに資せんがため、辭書體に編纂したるものなり。その用意の周到なる、體裁の整齊なる、初學の者と雖も、よく自在に適切なる語句を發見することを得べく、金玉錦繡の文詞、これを縦横に驅使し得ること、決して難きにあらざるべし。まかして、無慮二萬餘の熟語を網羅し、明細に、これが讀方と解釋とを施したれば、ひとり以て作文の資料たるべきのみならず、また、讀書の際、これによりて熟語の意義を探ぐることを得べきなり。

簡野道明先生 監修
國語漢文研究會 編

(六版 既成)

讀書作文用字訣

美本全一冊
定價金廿八錢
郵税金四錢

文字あつまりて句を成し、句あつまりて篇をなし、篇あつまりて章を成す。されば文字の用法を知るは作文第一の要義なり。苟も字法を知らざれば、何を以てか、句法を知らむ、況や篇と章とをや。現今、青年作る所の文を見るに、語字、謬字、偽字等雜然として紙上に滿ち、百孔千瘡、人をして卒讀に堪へざらしむ。これ、畢竟、讀書の精到ならざるに因ると雖も、また、適當なる參考書の乏しきに因らずんばならず。本書は即ち其缺を補はんとするもの、普通多く用ふる所の文字につきて、同訓にして異義なるものを辨明し、兼て、助字の大略をも説明したり。讀者能くの書に習熟し、然る後書を讀まば、讀書の趣味一段を加ふべく、又以て、完全なる文を作るを得べし。

落合直文先生 閔
藤井静子女史 編

(増補八版)

萩の下の露

大和綴美本 全一冊
定價金 廿二錢
郵税 金 四錢

作者

島田さく子○堀やす子○川合禮子○田中瑛子○大桑いよ子○山名ま
す子○前田さよ子○風當さく子○藤井瑞枝子○藤井静子○國分操子
○小池敏子○佐方たま子○遊佐とよ子○重野元八子○柴田静榮子○
平野蝶子○師岡須賀子

落合先生の門下才媛雲の如し、而して、皆文に歌に秀絶を極めて、彫管一枝の動
く處、花の如き麗文、月の如き名歌、意に従つて成らざるなし。本書は即ち其粹
を撰び、華を集めたるものにして、或は華麗、或は濃美、或は流婉、千紫萬紅收
め盡して彩雲烟霞に蔽はるゝの美観は、他に比を見る可らざるもの。且つ、一篇
一首、悉く落合先生の嚴密なる撰定を経たれば、正格嚴調一字の誤りなく一點の
疵なし、作文作歌の模範として大なる價值あるは喋々を要せざるなり。

金子元臣先生
柴山啓一郎先生 著 (三版既成)

百人一首評釋

洋裝 全一冊
定價金 廿五錢
郵税 四錢

世間、最も廣く行はるゝ歌集は、家定卿の百人一首に如くものなし。而かも、そ
のうちまゝ釋さ易からざるものあり。世人の一般にその訓を誤讀し、その意を誤
解せるもの、また少からず。而して、これが注釋を施せる書、古來頗る多しと雖
も、繁閑その宜しきを得ず、たまくこれあるも、單に意義の解釋に止まり、之
を文學的に評論せるものに至りては殆どこれあることなし。本書はこれを愛ひて
著されたるもの、一首につきて一々其意義の解釋と文學的の批評とを加へられた
れば、百人一首の眞價、ここに於て始めて世に知らるといふべし。

服部躬治先生著

中文法作文教科書

クロース製 全三冊

定價一卷金五拾錢○二卷金五拾五錢○三卷金六拾錢○郵稅各六錢

堀江秀雄先生著

中作文教科書

洋裝 全五冊

定價一、二各參拾錢○三、四、五各參拾五錢○郵稅各六錢

松平靜先生著

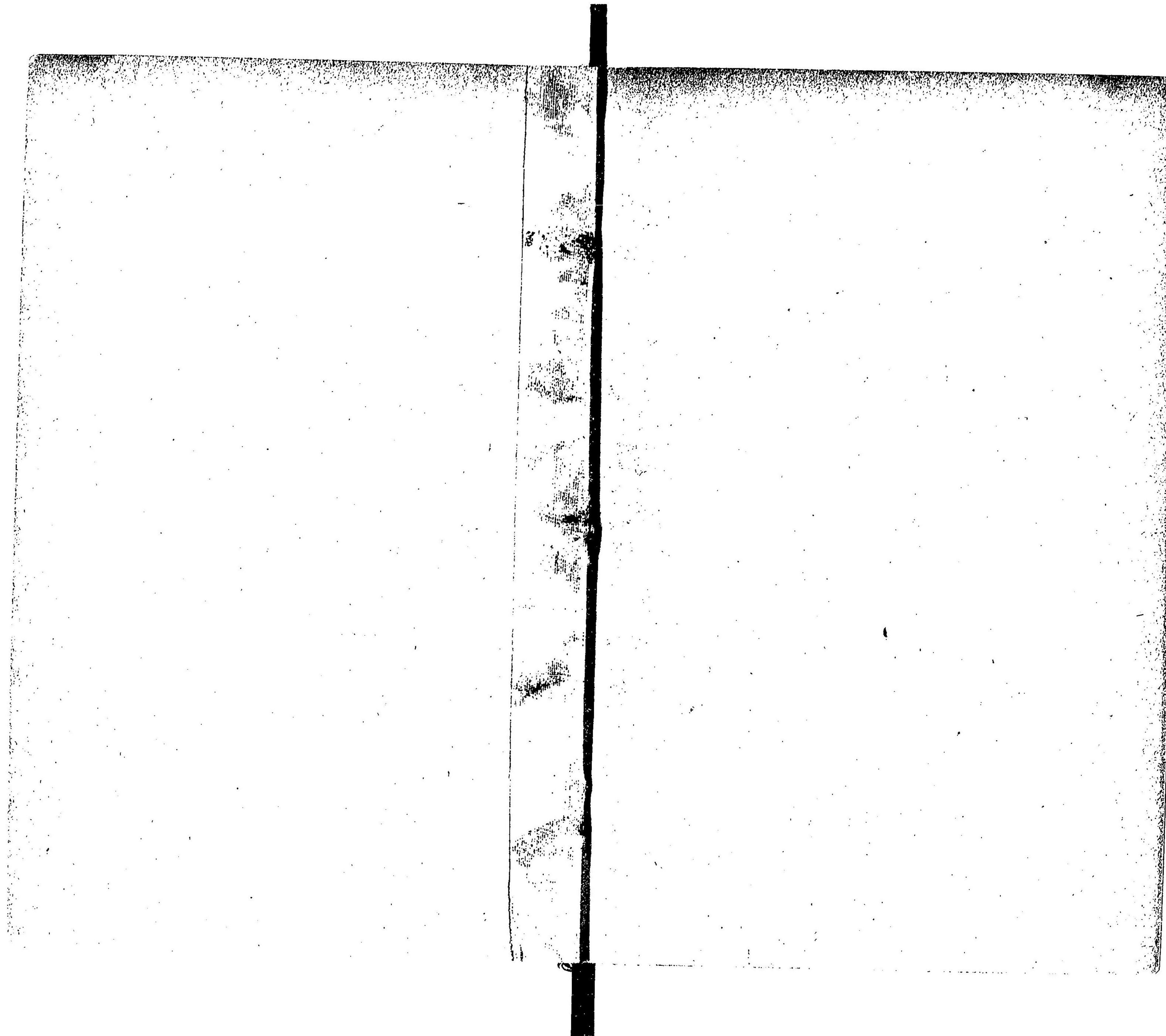
子女作文教科書

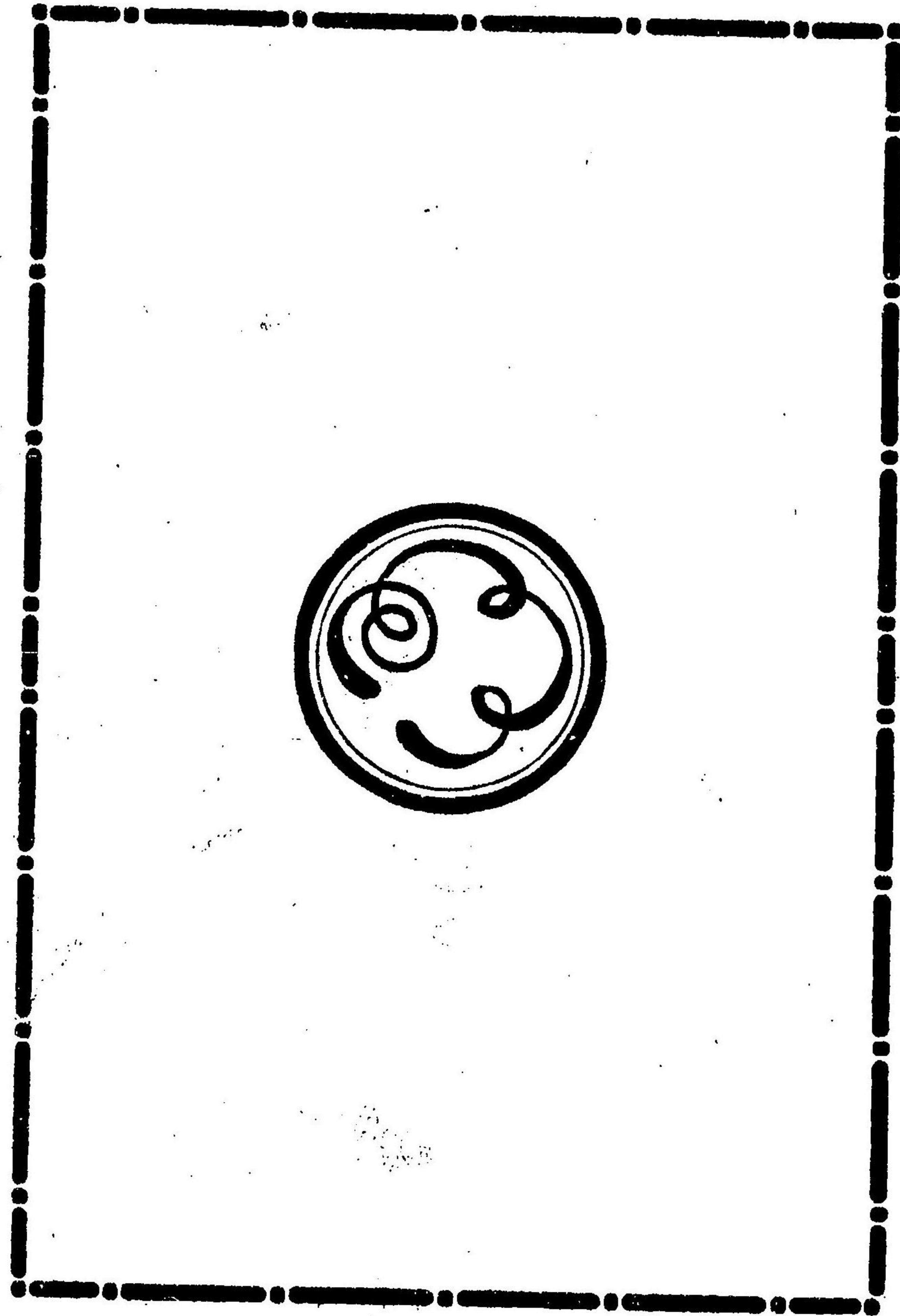
大和綴 全四冊

定價一編廿五錢○二編廿八錢○三四編各三拾錢○郵稅各四錢

明治書院出版總目錄

御入用の方へは御申越次第無代にて進呈すべし





080340-000-1

特19-31

中学書翰文範

橋詰 孝一郎/著

M38

DAC-4526

